

田部光子
オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with
Tabé Mitsuko

田部光子オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with Tabe Mitsuko

インタビュアー：張紋絹、北原恵、小勝禮子、中嶋泉

2010年11月28日 3

2010年11月29日 39

田部光子（たべ・みつこ 1933～）

美術家

日本統治下の台湾に生まれる。1951年福岡県立浮羽高等学校創業後、岩田屋百貨店に入社。独学で絵を学び、福岡県美術展や読売アンデパンダン展に、アスファルトや竹を使った独特手法による絵画を次々と作品を出品した。1957年に結成された福岡の前衛美術グループ九州派の代表的作家としても知られるが、その後も現在まで旺盛に制作発表を続ける。今回は、占領期の台湾の研究に詳しい張紋絹氏や、同時期の美術を研究する北原恵氏をインタビュアーに迎えて台湾での幼少期や美術をはじめたいきさつを詳しく聞き、また、田部氏も出品した「前衛の女性 1950－1975」（栃木県立美術館、2005年）のキュレーター小勝禮子氏を迎え、田部氏の長きにわたる制作や活動、表現に関する思想についてもお話を伺った。

田部光子オーラル・ヒストリー 2010年11月28日

福岡県福岡市 田部光子氏アトリエにて

インタビュアー：張紋絹、北原恵、小勝禮子、中嶋泉

書き起こし：小師順子

中嶋：では、始めさせていただきます。今回は大阪大学北原（恵）先生が代表の科学研究費助成事業と、日本美術オーラルヒストリー・アーカイヴの共同でインタビューをお願いしたいと思います。1日目は、田部光子さんの生い立ちのお話から、美術に携わられるところくらいまでを、1時間半から2時間ほどでお伺いしたいと思います。今日は張さんと北原さんに、主にインタビューをお願いしたいと思いますので、宜しくお願いします。

張：お願い致します。

北原：お願い致します。

北原：今日はだいたい台湾時代のことを主にお話をお伺いしたいと思います。すでに（2010年）夏にお伺いした時に、1回お伺いしたんですけども、それは今回はもう一度まっさらな状態で聞くというようですけども、田部さん自身の口から語っていただくことに意味がありますので、そのような形でもう一度お話しただけですか。

田部：はい。それで。

北原：それで、じゃ、順番にお話を伺っていきます。私が主に時系列順に伺っていきたいと思います。まずいつどこでお生まれになったんでしょうか。

田部：台東、台東街っていったね、台東庁っていうのがあるんですよ、庁舎がね、あの、産まれたのは、ダイブじゃないですかね、ダイブっていうところ。ちょっと奥地に。父がね、まず警察官に応募して渡ってるわけですよ、霧社事件のあと。そして、母がそこに嫁ぐんです。その蕃社で、武器をね、武器を放棄させるという、蕃社の人に。霧社事件以来、で、そのことは私は母から聞いてるんですけど、母はね、やっぱりどこでも女が強いですよ。台湾に行ったと同時に、蛮語を覚えてね、あの、マイクでね、「今なら罪にとわれないから、この運動場に武器をみんな持ってきなさい」と、呼びかけたそうですよ。そうしたらぞろぞろと。いろんな武器を持って武器放棄に協力したそうです。

北原：お母さんが、ですか。

田部：お母さん、父は何年居ても蛮語をわからないって。どこの男もそうなんですよ。だから、そうしたらね、どんとんと持ってきてくれてね、それで、まあ、そこは治安が安定したんじゃないですか。

北原：それはいつ頃お母さんからお伺いになったお話ですか。

田部：あの、とにかく私はずっと母と一緒にいたからね。

北原：お父様と一緒にではなくて、お母様と主に一緒に暮らされた。

田部：父はね甘木にいましたからね。私はこっち、甘木の柿添ってという町営住宅にお世話してもらって、入っていたんですよ。両親ともに、で、後でそこは払い下げになったんですけどね。で、だから母はしょっちゅう、私も下宿して岩田屋に勤めていたからね、下宿してるところにしょっちゅう来てましたよ、あの人は私が大好きで、もう結婚するのも大反対して。

北原：戦後ですね。じゃ、ちょっともう一度戻りますけれども、1933年1月8日に台東のダイブという奥地でお生まれになったということですね。

田部：全部ね、父が取り上げてるよ。産婆さんとかその産婦人科は無いからね。あの人は衛生局にいたから、そういう知識がすごいあるらしくて。勉強するのよ一生懸命、あのその本を読んで。だからみんなでべそでもないし。

北原：お父様が臍の緒を切って。えと、お父様のことをお伺いしますが、お父様のお名前と、どういうところで育てられたのか。簡単に。

田部：石橋光五郎。

北原：あの、どこで産まれたんでしょうか。

田部：それはね、朝倉郡松末村っていうところ。「松」に「末」と書いて……

北原：福岡県ですね。

田部：松末村赤谷っていうところですね。

北原：朝倉郡、松末村、赤谷。

田部：父のところは製材所で裕福だったらいいんですけど、なにかで破産して、だから、父が長男だから、なんで長男が光五郎ですかね…… 長男だから一家を支えるという意味で台湾に渡ったの。あの、ブラジルにしようか台湾にしようかってね随分迷ったそうですよ。だけど近いほうに行こうと思ったんだって。

北原：何年に行かれたんですか。

田部：さあわからんね、そんなのはもう全然。歴史……

北原：それは、じゃ、後に霧社事件の後に行かれる前のお話ですか。

田部：いやだから、後に行ったんでしょう。

北原：霧社事件の後に行かれたのがはじめて……

田部：霧社事件がいつか、知らないけどね。

北原：1930年なんですけども。

田部：30年。そうしたら私は生まれたのは33だから、もっと前。霧社事件の頃いたのよ、父は。

北原：そうですね、だってお母様も台湾で結婚されるんですよね。

田部：そうそうそう。私が末ですからね。あの、姉はね、10歳上よ。姉もあそこで生まれてるんだから、じゃ、10年足した、もっと足して、13年ぐらい足した頃ですよ。

北原：1920年ぐらいですね。

田部：うん、そうそう。

北原：もうすでに行っておられた。父様は明治23年にお生まれになったということですね……

田部：ああ、母が30年、明治30年だったと思うから、多分そうでしょうね(注：日本植民地時代の台湾に起こった先住民族の反抗事件は多くあったが、地理関係と時代関係から考えると、田部氏のお父様とお母様は「大分事件」の後に台湾に渡ったと思われる。「大分事件」は1915年に台東に隣接する花蓮のほうの蕃地で起こった事件であり、有名な霧社事件と似たような事件であるため、記憶違いがあったのではないかとと思われる。また、最初に住んでいたという「だいぶ」も、台東の「大武」ではなく、花蓮「大分」ではないかと推測される)。

北原：お父様のことをもう少し伺いますが、実家のお仕事はどういうお仕事だったのでしょうか。

田部：なんかね、製材所だったとかいってましたよ。そしたらなんか友達がその赤谷村に行ってね、その友達はもう亡くなったんですけども、原鶴で旅館をしていた友達が、調べに行ったらいいんですよ。そしたらね「あんたと私は親戚なんだよ」とか言ってね、全然知らなかったんだけど。でも、すごい、商売がはやってて、赤谷の川が逆に流れても、石橋は潰れんっていわれるほどだったのよ、って。その畑古枝(ひさえ)さんというんですけどね、その人がいってましたよ。私もその出で、あんたと私は親戚よって、徹底的に調べてきたって(笑)。道理で仲が良いのねって。あてにならんですよ、そんなの。

北原：30歳代くらいで行かれたってことですよお父様は。

田部：そうですね。

北原：小学校を出て行かれた。

田部：明治の頃は小卒ですよ、みんな。でも父の家は裕福だったので中学に入ったかも知れない。字が上手で頭も良かったから。そうしないと警察官になれないからね。

北原：ご兄弟は他におられたんですか。

田部：たくさんいたそうですよ。母がね、兄弟6人って言ったから嫁に行ったのに、12人くらいいたよって。

ぶーぶー怒ってました（笑）。母もね、あの母の家も、破産したんですよ。八十松（やそまつ）っていうのが祖父ですけど、それが政治に立つ人の保証人になって、潰れたんです。それを再興するために母は婚期が遅れたの。普通二十歳までで行くんですけど、もう23になってて、あの、それでその、増太郎、父の父です。増太郎さんが、畑で働く母の姿を見てね、3年も通って来たって。だからとうとう行ったのよって。母がよく言っていました「私がね、美人だからね、53軒からもらわれた」んだっていつもいばってたよ。「53軒からもらわれたのに、そして選って選りかすにいったのね」って私が言ったら、「そうそう」とか言って（笑）。

北原：お母様はお名前はなんておっしゃったんですか。

田部：母？ キミ。

北原：字はどんな字ですか。

田部：カタカナのキミ。あの頃カタカナの名前流行ってましたよ。母の母もリエ。

張：ご実家の苗字は何ですか。

田部：田中。まだお墓がありますよ、杷木町に。それと昔の家が、井戸堀だけ、あの堀だけ残ってる。

北原：お父様とお母様は、どんな方だったんでしょうか。あの、なんか、あのお裁縫が上手だったとかお伺いしましたが。

田部：母はそうですね。もう十二単も縫えるほど。だから私がいろいろとすることをね、援助したんですよ。自分も東京に出てね、和裁の専門家になろうと思ってたって。だけどあの不本意ながら台湾にお嫁に行ったから、あんたは好きなことしなさいって。父はそんな汚い絵を描いてたらもらい手がないとか、いつも怒ってましたけどね。母は「やんなさい、思い切って。やりたい放題しなさい」って。家庭科とか。和服を1枚縫うとか。「和服をね、1枚ぐらい縫ったってなんもならん。私が縫っちゃうけんね、あんたは英語を覚えとき」そう言うのよ。なかなかの見識ですよ。あの人。いったこと、いろいろなことを思い出すとね、見識があるね、と。「あんまり上手に縫いなさんなよ。あの、背筋と前とを縫うって笑われたぐらい、あんまり綺麗に縫ったらね、お母さんが縫ったってわかるから、適当にしとき」って。悪い親子で。

北原：あと、ご兄弟は。

田部：3人ですね。

北原：お兄様とお姉様。

田部：はい、姉まだ生きてます。87だな、来年米寿やね。（注：88歳で亡くなった）

北原：お2人ともじゃ台湾でお生まれになったんですか。

田部：そうです。で、兄はあの、予科練で戦争行ったからね。海軍兵学校に痔が悪くて落ちたんですよ。それで帰ってきて父はすぐね、地元のお医者さんをいろいろ専門家を知ってるの。痔の専門家を呼んでね、家にきて盥でこう煙で燻し出すの。でだんだんだんだん責めていってね、ある日「落ちたー」って、一生懸命探し回っ

たとかって（笑）。それから出ないからね。なかなか名医ですよ。私も扁桃腺が悪くて、朝熱出したらね、台湾のお医者さんがね、人力車で来るんですよ。で、注射を一本打ったらもう、けろっと治て、すぐに学校に行っていました。学校にまた人力車で行って。病気ん時だけね。校門に入ったらすぐ治るんですよ。

北原：学校はどこに行っておられたんですか。

田部：学校？ あの、台東の国民学校。

北原：じゃ、人力車で行ける距離。

田部：ああ、近いんですよ。500メートルぐらいしかないのに、乗っていくの。

北原：街の中に住んでおられたんですか、台東の。

田部：そうですね、だから官舎はあの、山手のほうですからね。だから北町っていうんですよ、北町に官舎街があったんですよ。

北原：何軒くらいあったんですか。

田部：結構固まってましたよ。そして台湾は台風と地震が多いからですね、2階建てが建てられないんですね。あの、呉服屋さんぐらいしか。旅館が（2階建てを建てても）よかったかな。2階建てがようやく許可されて。普通の家は全部1階です。だからその、その代わりに床が高いんですよ、洪水でもいいようにね。内地に引き揚げてきて一番驚いたのはね、玄関が低いことでした。ひゅっと上がれるでしょ。あれっと思って。台湾は廊下とかもぐーんと高く、下をコンクリートで塗り固めてあるんですよ。だからそこで、ままごと遊びが出来るの。

北原：その頃の小学校の頃の1日の生活はどんな生活でしたか。

田部：だからもう学校が大好きで、とにかく早く行って誰か来たらドッチボールしようと待ち構えていました。帰ってきたらね、母が家の門から出たらいかんっていうわけよ、蕃人にさらわれるから出たらいかんっていうでしょう。だから家の近所でしか遊べないんですよ。なんか、あの、なんかの研究所の空き地で日が暮れるまで遊んでましたね。その官舎の人たちと一緒に。

北原：えーど、じゃ、全然あの、地元の人たちとの付き合いは……

田部：台湾人？ 全くないですね。それをみんなね日本人ってね、「あんた、台湾行っとったんなら中国語できるやろ」とか言いますけどね、全く分かれてるんですよ、植民地政策で。そして、あの、その現地人の入ってる住宅に行ったのはね、敗戦の後の旗行列です。その旗が、中国の旗に換わっているんですよ。持ってる旗が、日本の旗から中国の旗にいつの間にか換わって。そしてその時にやっと、その台湾人が生活しているところを通ったからね。やっぱり貧しい生活をしてましたよ。あの、玄関先で立ったままご飯食べてる、とかね。そういう状態だったのね。

張：そうしたら、官舎街の生活はどんな違いがありますか。みんなご飯は家の中で食べていたんですか。

田部：うん、官舎街はもう日本人の生活ですから。あの、きちっとして。で、戦争中、日本みたいに食糧不足もないからね。七面鳥と豚肉と、たっぷりある、毎日。

北原：それはどこで買っておられたんですか。

田部：商店よ、市場。

北原：日本人のための市場。

田部：そうそう。だからそんなものもね、電話 1 本で持ってきますよ。届けてくれるの。

北原：お母様は、その、地元の先住民のことばも喋れたわけですよ。

田部：それは、蕃社にいた頃。必要であればすぐに覚える。

張：蕃社はどれくらいいたんですか。小学校の時にはもう、街の……

田部：幼稚園に行ったのは、兄弟で、私だけだからね。幼稚園から行ったのは。だからあの人たち（兄姉）は寮に入れられたりしてるよ。かわいそうですよ、だから。母親の愛情に、恵まれないで、あの小学校から寮生活でかわいそうですよ。だから姉もね、なかなかこう、人とうまくいかないの。

北原：田部さんは幼稚園から、幼稚園に入られたというのは、台東市内にその頃移られたということですね。

田部：そうそう、そうです。父も警察官から文官（警部補）の試験を受けて合格して、だからこんな風になって（写真を見せながら）、文官として、生活できるようになったからですね。

北原：えーと、それ以前幼稚園に入るまでは、じゃ、山の中で生活しておられたんですか。

田部：そうですね。

北原：田部さんも一緒に。

田部：私は全くあの、その記憶があんまりね、ないからね。そういう、そこまでは。

張：幼稚園前ですよ。

田部：うん、幼稚園前だからね。

北原：5 歳くらいでしょうね。そうしたら。

田部：うん。

田部：だから、でも、温泉に行った。知本（ちぼん）温泉とかあるよね。今もあるでしょう。

張：はい。

田部：あの、知本温泉とかよく行ってたから、そういうのは覚えてるよ。それとか父親が魚釣りに。あの、大きな川があったんですよ、台東に流れてる。そこによく行ってました…… 魚釣りとかね。海岸の地引き網にも言ってた。早朝に。

張：で、先に、お母様のことをちょっと少しお伺いしたいのですけれども。お母様はあの、お父様と結婚してから、台湾に来られたんですか。

田部：いえ、結婚してないよ。写真かなんかでね。もう、だから、今みたいに恋愛していくんじゃないのよ。写真結婚、ブラジルの人もそうでしょ。だから行ってみて初めて会うんですよ。必要なければ、10日でもものを言わなかったとかいってました。無口で。

小勝：お父さんが。

田部：そう。

張：結婚して初めて台湾に来られたんですか。

田部：いやだから、父はいたのよ。そこに母だけを増太郎さんが送って、行って、お嫁さんになったわけ。一緒に行ったわけじゃないのよ。

小勝：増太郎さんは、福岡にいたんですね。

田部：あの、だから、福岡県松末村。

小勝：光五郎さんの父。お父さんですよ。

田部：そうそう。

小勝：増太郎さんが、福岡でお母さん、キミさんを見初めたわけですね。

田部：そうそう、田圃の仕事とかね。全然休憩しないで仕事するんだって。この女は凄いつて思って。

小勝：同郷の方ですよ。

田部：同郷っていうか、ちょっと離れてるけど。

小勝：朝倉郡ですね。

田部：うん。

北原：お母様は教育は、女学校に通っておられたんですか。

田部：だれ。

北原：お母さん。

田部：お母さんは、小卒でしょう。行けないもん、家が潰れて。下の子をおんぶして行ってたってよ、小学校に。みんなそうですよ、あの頃。それであの人は、女はたばこの栽培が出来ないんだって。でもそれをしないといつまで経っても家を再興できないから、たばこの栽培までしたよ、って言ってた。

北原：たばこの栽培が出来ないというのは、

田部：たばこのハッパ。男しかできないって、体力がいるんで。働きもんですよ、あの人は。体も丈夫でしょうね。後に、引き揚げてきて苦労した頃にね、結核にかかってんのよ。でもそれでも自然治癒してるの（笑）。なんでもかんでもね、全部自然治癒してるの。

北原：あと、ちょっと生活のことをまた、お話をお伺いしますが。たとえばお正月なんかは神社に参拝されたりしたんですか。覚えておられますか。

田部：正月だからって何かは、無かったですね。

北原：よく行っておられましたか。

田部：神社？

北原：はい。

田部：それは学校から連れて行くからね。よく神社の夢を見てた。神社の境内の、同じ夢をよく見てた。能楽堂みたいなものがあった、踊れるんですよ、祭り時に。で、私も踊りたいなあ、なんて思ってた。

北原：1人で神社に行ったりは、やっぱり危ないからないですか……

田部：1人は危ない。どこも行けない。だから何年生…… 4年生かの時にね、仲の良い友達の家が蕃社にあるんですよ。蕃社ってというのはね、2キロも離れてないかな。蕃社の現地の小学校の校長先生の娘だったの。そこまで遊びにいったことがあるよ、内緒で。そしたらばれてね、帰ってきたらね、今度行ったらお尻を叩くよ、って言われていたの。それ1回だけだね、母から叩かれたの。ぜんぜんそういう躰というか厳しさが無いのよ、うちの家庭というのは。

北原：でもよっぽどそれが禁じないといけないようなことだったんですね。

田部：そうそうそう。危険だから。キャンデーも食べられなかったよ。あの暑い台湾でね、キャンデーを1本も食べたことない。赤痢になるって言うんですよ。衛生観念だけは厳しかった。他は何にも勉強しようがしまいがね（笑）。あれは大したものですよ、あの教育は。

北原：じゃあ、その頃でよく記憶に残っている、楽しかったこととかそういう思い出は……

田部：楽しかった頃ね。なんか、劇場でね、軍国主義の挨拶をさせられることか（ママ）、覚えてますよ。

張：どのような挨拶なんですか。

田部：映画の合間にね、ステージで5年か6年になったらできるんですよ。良いお洋服着て、先生が原稿を書いて、ただ暗記して言うだけ。

北原：田部さんが前に立って言うわけですね。それはでも、級長とかそういうことですか。

田部：そうそう級長任命があったでしょ。

北原：ええ、ありました。じゃ、リーダーシップを持って……

田部：もう、幼稚園からリーダーシップですよ。どこでもそうだなあと思う。だからこの小学校もね、軍隊に全部接収されるんですよ。そして遠いところに、ちょっと駅の裏の広場を通過して、川を渡っていく、そして掘っ建て小屋みたいなのが建てられて、そこで、勉強してたんですよ。

北原：学校が移ったわけですね、軍隊に接収されて。

田部：そうそう、（写真を見て）私の横に小ちゃい人がついてる、山下由美子ちゃんという友達がね、いつもなんかこころに小ちゃい……の子はね今でいう登校拒否ですよ。だから、朝迎えに行って連れて行くの。またそれが、丸太橋から落ちるのよ。そしてまた川にいて、救い上げて連れて行って。ずっと面倒見てたの、私。そしたらね、その由美子ちゃんお父さんと一緒のとき機銃掃射で亡くなったんです。空襲が激しくて。空襲も機銃掃射って、ご存じないでしょうけれど、あのB29か26が来てね、ばーっと機関銃で撃つよ。で、子どもが遊んでるから、にやにや笑いながら。もう操縦士の顔が見えますよ。見えるほど。だから、あんなに近から当たらんかったんでしょね。だから私は「みんな逃げろ」ってみんな連れてね、キニーネ畑に。この引っ込んだところにばーっと臥せるんですよ、みんな。

北原：キニーネってというのは、どんなものなんですか。

田部：インゲン豆みたいにこご、添え木で伸びていくの。キニーネは、マラリアの薬なんです。それがあったから、まあ、助かったかな。キニーネ畑に逃げて潜む。なんか池もあってね、ひしの実を取ったりね、遊びながら帰ってきてたの。だからその空襲でも面白がってるのよね。

北原：怖くなかったですか。

田部：怖くないです。面白くてしょうがない。

張：空襲って、毎日だったんですか。

田部：いや、毎日はないけど、あの台東は軍事基地だったからね。あの、ミンダナオ島の敗戦がなかったら、台東に上陸するはずだったんですよ、アメリカの軍隊が。台湾をすっ飛ばして沖縄に直行したんです。だから石運びの陣地造りの動員も無駄だった。その陣地の動員、3年4年、その頃から行ってましたよ、あの、海岸のこんな丸い石をね、なんかこんなものに入れて、どんどんとトラックで運ぶのよ。それがこの台東の神社の向

こうかなんかの山を掘って陣地を造っていたらしいんです。

北原：子どもも手伝ったんですか。

田部：うん、私達は動員されて、8歳か9歳ですよ。

張：だいたい小学校の何年くらいですか。

田部：3年4年ですよ。ほんとにもう。

北原：石運びを手伝った。

田部：うん。でも、少しでも重たいものを持つと思ってね。人が1個持つときは2つ持つという、忠君愛国。

張：みんなその時はどのような気持で。

田部：みんな一生懸命炎天下に働きましたよね。だけど宮田っていう中尉がいてね、剣吊って監督してるのよ。「あんたなに遊んでんの」というような感じでね。だから、そしたら「あんたんとこ、どこ」って聞く、「北町のどこどこ」っていったらね、「遊びにいいいいかな」っていうから、「来ていいよ」って言っとったのね。まさか来るとは思わんでさ。中尉ですよ、相手は。ある日四畳半で勉強していたら、こんこんって窓叩くの。見たら来てるんですよ。それから大騒ぎでね。それから毎日毎日宴会、うちで。姉は満州から帰ってきて、姉は若い娘ですからね、またそれ目当てにも来るんですよ。私が連れてきたのに、私は台所の四畳半の隅っこで本ばかり読んでるの。不公平でしたよ（笑）。ただ一人渡辺さんという人だけはね、「秋の日の ヴィオロンのひたぶるにうら悲し」ってヴェルレーヌですか、あれとか、野口雨情の詩とかをね、読んで聞かせてくれてたんです。

北原：その人も兵隊さん、日本兵……

田部：当然日本軍の下士官でしたね。で、その宮田中尉はね、終戦後日本に帰ってきたそうですよ。姉に結婚を申し込んでいたけどね。彼には許嫁がいるのに、よ。うちの母はね、問い合わせてるの、本籍に。本籍から許嫁がおりますってきてるのよ。しっかりものですよ、母は。

小勝：そうですね。

北原：当時、どういうものを食べていらしたんですか。衛生が厳しかった、アイスクャンディーはダメだというお話ですけど。毎日、たとえば朝ご飯昼ご飯はすき焼き、ホイコウ鍋、巻き寿司、豚汁、七面鳥の肉など。

田部：私は小さい時食が細くてね。明太子をこぼしてね。「ほら、さくらごはんよ」って、それとあの筋子、いくらっていうかね、あれが好きで、あれをご飯の上に載せたりしてね。もう苦労してましたよね母は。私に食べさせるのに。なぜかつつたら回虫がいたの。それが映画館で映画を見ていると……あの時はね軍国主義といいながら、ちゃんと海人草を小学生に全部飲ませるんですよ。軍国主義といえども、いい加減じゃないんですよ。ちゃんと将来を担う子どもは大事にしたい。海人草って煎じてね臭くてね、それをコップかなんかでいっぱい飲ませられるの。で飲んだら出たんですよ。映画見に……うちの父は映画が好きなんだね、よく映画に連れて行ってきて。「帰ろう帰ろう、とにかく帰ろう」って（私が）いいだしてね、なんで帰ろうっ

ていってるのがわからないんだって。帰ってきたらねトイレに行ったら、出たのよ、回虫が。こんな長いのが。それからは元気になったの。それまではもうあなた、リュックを背負わしても、ふーっと後ろに引っ繰り返ってね、細くてね、生きられるかと思ってたって母が言ってましたけど。

北原：日本からは何か送ってもらってとかそういうこともあったんですか。

田部：ありますよ、りんごを送ってきたよ、りんご。もうそのりんごでやっぱり、《林檎》ですね。台湾はりんごがならないからね、りんご箱に入ったりりんごを送って来て、こう、取り出す時の感動がね、まあやっぱり、絵描きになる要素ですかね、全部ヴィジュアルに覚えてる。ヴィジュアルで覚えてるね。そのシーンシーンで。

北原：誰から送ってきたんですか。

田部：内地でしょう。内地にやっぱりお金を送ったりしたら、お礼に何かを送るのよ。

北原：親戚。

田部：そうそう。光五郎さんの家に送ってたんじゃないの。

張：学校のほうの生活はどんな…… たとえば授業とか。

田部：授業はね、ええまあ普通にありますよね、今のよう。5教科プラス、音楽とか体操とか。

北原：小学校から英語が入っていたんですか。

田部：英語は、どうだったのかな。あれでも、英語はね、戦争中もやってた記憶があるよ。私。だからかなりルーズでしたね、植民地台湾は。そんなほら、「なんとかにむかって遙拜」とかさ、あんなの無かったよ。教育勅語だってね、最初だけ覚えておけばいいの。要領が良いからね。「朕惟フニ我力皇祖皇宗」だけ覚えておけばさ、はい、次とかいって、あたしよ。そこだけ当てられるってわかってるからさ、そこだけ覚えてるの。

北原：1クラス何人だったんですか。

田部：何人いたかね、やっぱかなりいましたよね。

北原：台湾からの方は……

田部：1クラスに二人ぐらいでした。

北原：(写真を見て) これで、2つクラスぐらいですか。

田部：これだけいたんじゃないの。40人ぐらいいるんじゃない。これが2クラスよね、これが、先生が2人いるからね。

北原：通っている子どもは日本人ばかりですか。

田部：そうです。あのね、納税者、あの、えと、なんっていうのかね…… 高額納税者の子どもだけ来れたの、国民学校に。それでね、林玉蘭（りんぎょくらん）さんが来てた。林玉蘭さん、すっごく頭が良くてね。その人に台湾に行く時に連絡したんですよ、会いたいつつて。台東にいるからっていうから、そうしたら何にも言ってこなかったの。来てくれなかったのよ。で、なんか友達に聞いたらね、級長になれなかったのを恨んでるんだって。自分がね、頭良かったって言うんだって、それはね、算数だけなのよ。人間てとんでもないところで恨まれてるのよ。そしたら3ヶ月ぐらい経って手紙が来ましたよ。「失礼しました、私アメリカに行ってた」って。アメリカと貿易をしてるんですよ。やっぱ、頭が良いからね。林玉蘭さんの家にうちの母が、兄の剣道着を預けたのよ。それをまだ預かってるんだけど、どうしたら良いでしょうって言ってきて。いや、もう処分して下さいって。で、はい、それじゃ処分しますって。それぐらい義理堅いのよ、台湾の人は。中国と違うよ。

小勝：林玉蘭さんのお宅は高額納税者だから、国民学校に行けたんですか。

田部：そうです。そうです。まあ、多くて（クラスに）2人ね。もう、普通1人です。

北原：男の子のクラスと女の子のクラスとじゃ別々なんですか。

田部：別でした。その、疎開してからも別でした。

北原：疎開はどこにされたんですか。

田部：疎開地は、いやだから学校が疎開地だったんです。

北原：軍に接収されて……

田部：もう兵隊さんだらけでしたよ、街の中は。家の前の教育会館も。でもそこそこにね、やっぱりあの知識人もいるのよね。その教育会館にいた人も、今井さんという人はね、毎日夕方になったらね星座を教えてくれた。あれが蠍座だ、これがオリオン座だっていうのをね。全部の星座を。台湾からは南十字星の半分しか見えないのだということも教えてもらいました。それで私は天文学にえらい興味を持ったんですよ。だからどこに行ってもね、インテリっていうのはいたのよね。野蛮な下衆な兵隊がいる一方では、そういう立派な人もいましたね。

北原：アメリカ兵の機銃掃射だったりとか、死んだのを見たというようなこともありましたか。

田部：陣地に1人大砲の名人がいてね、何機もB29かB26を落としたの。ばーんと命中して墜ちたっていてばーっと見に行ったのよ私。そしたら、足がこんなに大きくてね。こーんなに大きいの子どもだったから大きく見えたのか、まあ、やっぱり蒸し焼きになってたからね。

北原：飛行機の中でですか。

田部：中でね。だから特に足が膨れとったのかも知れないし、大男だったのかも知れないね、ガリバーみたいに。で、それでトラブルが起こったんですよ。あの歯医者さんが、（アメリカ兵が）金の指輪をしてて、その金の指輪が抜けないから指をちょん切ってね、持って行ったんですよ。それと外科の先生。うちの父はとってもその人尊敬していましたがね、手術が上手で。その人がね、ペニスを切り取ってね、ホルマリンに漬けたの。

北原：その死んだアメリカ兵の……。

田部：そう。もうそれでね、その人はね、その歯医者さんは15年か16年の刑で帰ってこられたそうです、刑を終えて。でもその外科の先生は20何年だからね、とうとう獄死されたんだって。それね、やっぱり密告者がいるんですよ、どこにでも。復讐するは我にあり、です。

張：でそのB29がああ墜ちたのは、終戦直前ですか。それとももっと……

田部：そうね……あの零戦がだーっと帰ってきたのよね。旗を屋根に上がって振りまじけど日本の旗をね。この前ネットで調べてわかったんだけど、あれが多分レイテ島沖海戦に出陣する最初で最後の神風特攻隊の隊列を組んで飛ぶ姿だったと思うのよね。それを私はこの眼に焼き付けているんです。あの大本営発表は滅茶苦茶だったからね、信用できないもん。凱旋だ凱旋だっていって、実は大負けしてる。私は疎開しないってことになってたから助かったんですよ。1人で行くのは嫌つつって、しないっていったら、夜中の2時頃その渡辺さんが来てくれたんですよ。それで、光子さんはいざとなったら陣地に連れて行く、と自分が。責任もって連れに来るから、ご安心下さいってわざわざ言いに来てくれたのよ。そういう人がいらっしやるんですよ。いつでも、どこでも。

張：空襲がその時は、あの……

田部：あ、空襲はね、もう街にね、韓国のなんとかヨンピョン島なんてもんじゃじゃないよ。50キロ爆弾が落ちたらね、ぶわーっと穴が空いてね、池が出来るのよね。そしてもうほとんど全滅なの。もうあんな、かけらやらないですよ。立派な防空壕に入った人がみんな死んで、蛸壺に入った人が助かったらしいです。

張：みんなその時は、いろんなところで（蛸壺）掘っていましたんですか。

田部：そう、そうでしょうね。街ん中でね。で、私の友達の旅館も焼けましたからね、その爆撃で。

北原：敗戦はどこで知られましたか。

田部：あ、敗戦は、いよいよ危ないとかいってどっか山の奥を父が買ったって言ってね、その近くの旅館に行っただですよ。いよいよもう危ないからみんな引き揚げてそこに行こうって言って、家族全部でだったら私も行くでしょう。で旅館に泊まっていたの。そうしたら、ばたばたばたばた突然騒がしくなって、もう負けたと、戦争に負けたということが、ニュースが入ったの。玉音放送は聞いてないよ、だから。

北原：その時にはご両親はなんて言うておられましたか。

田部：うちの父はね、前からね、とんでもないこと言ってたのよ。私6年生とかを捕まえてね。映画が好きなんですよね。映画の前に必ずニュースがあるのよ。そのニュースから、東条英機がね、あの、飛行機のタラップから降りてくるところから始まるのよ、ニュースがね。そしたらうちの父がね「この男は大した男じゃないぞ、眼がきょろきょろしてる、戦争も負けるぞ」。そんなこと言うんですよ。私がそんなこと学校で話したら大変なことになるのにね。

北原：しかも警察官でしょう。

田部：（警察官）上がりでしょう。もう文官になっていたから気が許したのかどうか知らないんですけどね。あのもう、とにかく新進気鋭というか、写真が流行ったら写真に凝って。暗室まで自分でつくるのよ。で綺麗な写真を撮らんと気がすまんの。で弓が流行ったらね、自分の家に弓の的をつくってね、私がいるのに、バシンバシンと、危なくてしょうがないですよ。で鶏も飼ってたし、鶏小屋と一緒に兎も飼ってたし。鶏はお客さんとかんときに絞めるのよ、でご馳走するのよ。正月とかも。それでいっぱいどんどん増やすの。雄が1匹だけいて。ものすごく大きいんですよ。私が小さかったからか、綺麗なしりっぽでね、私が時々からかうと、怒ってね、バババって横に走ってきてね、ここの足のとんがりで刺そうと。

北原：田部さんは戦争に負けた時どう思われましたか。

田部：ああ、なんも……。すぐね、女学校が始まったのよ、考える暇もなく。それで行ったですよ。そうしたらね、剣吊った北京から来た人がきて北京語を教えるんです。「ペッペッモッホッ」って、その発音記号からですよ。標準語だからね。難しいのよ、これがね、発音が。

張：でも、さっきすぐわかりました。発音すごくいいので。

田部：そうそう、それぞれ。それでね、テストがあってね、私75点とってねがっかりきて。そんな点とったことない。いやあ、これで落第やねって思ったらね、一番良いんだってそれ。75点が最高点だって。で、褒められたの。

北原：学校で聞いていたのは、要するにほとんど日本人ばかり……

田部：うん、げらげら笑いながらね、おかしくておかしくてね、「ペッペッモッホッ」が。

張：先生たちには怒られなかったんですか。

田部：怒られなかったよ。

張：優しい先生……

田部：優しい先生だったと思う、みんな。

張：軍人さんだったんですか。

田部：中国国民軍じゃないですか？ 蒋介石ですよ。制服で来るんだから。剣吊ってたよ、うちの父だって。会社に出勤する時。背が低いから、剣がズルズルするとか思ってた。

北原：どこに通っておられましたか、お父様は。

田部：台東庁。役所の職員だから。公務員ですよ、今言えば。衛生局だから。それで、マラリアとか腸チフスの予防に貢献したのよ。出張所みたいな、分室みたいなもの作ってね、そこに台湾人を住まわせて、定期検診して予防注射して、というふうに。だから終戦と同時にね、やっぱりほら明日から日本人の家に入りましたら、捕まるかも知らんっていうその晩にね、どんどん米一俵ごととかね砂糖とかね、それから台湾の餅こんなに大きいでしょう、あれ2つとかね、運んできてくれたの、台湾の人が。

張：台湾の人。先住民ではなくて。

田部：じゃなくて、台湾の人と思うよ。原住民はもうちょっとこう、農耕っていうか、毎日水牛に乗って行ったよ。だからそういうちょっとした台湾人の、台湾の小学校出たり中学校出たりして、一応頭のいい人に教えるわけよ。だからそういう人がしてくれたんですよね。で、それで（日本人と接触しても）大丈夫だってわかって、引き揚げる前に自分の家のディナーとか、呼んでくれてね。そこで一つ覚えてんのはね、真っ赤なスープが出たの。

北原：どんな味でしたか。

田部：真っ赤なスープがでてね、これがもう、本当に美味しかったです。だから台湾に行った時にね、みんなに聞くけどね、そんなスープは無いって言われたね。

張：甘いスープですか。

田部：いや、甘くもない、自然な味だったね。

北原：中に何が入っていたんですか。

田部：何も入ってないの。だから鶏ガラかなんかでとってるんじゃないかな。ここのスープみたいにね。他のいっぱい出てたけど、とにかくその赤いスープだけが、またヴィジュアルですよ。目にバーンとその赤いスープが飛び込んで来たんでしょね。

北原：それは引き揚げの前にいただいたスープなんですね。

田部：はい。それで、次の年引き揚げerようになったからですね。

北原：1946年に。

田部：1人1,000円持って帰って良いんですよ。1人1,000円もって、ずら一と並んで、柳行李一杯ずつ。開けて検閲があるんですよ、台湾の兵隊さんの将校みたいな人のね。

北原：1人、ということは田部さんも1,000円持てるってということ。

田部：そうそう持てる、柳行李に。みんなね姉の嫁入り道具を持たせられた。だから柳行李はずっととってたんですけどね、最近はなくなったね。実はその時、七五三の時に持つ綺麗なバックがあるでしょう。あれの中に300円入ったんですよ。私の小遣い銭かなんかで。検査官がそれをぴっと取ったのね。で、開けようとしたけど開かないんで、ぼんと置いたんですよ。後で開けたら300円入ってたの。これが開いてたら、私は殺されたんじゃないか。なんかそこから運の良さというのがね、ずーっと続いているんよ、私。命拾いしたと思って。

北原：どなたと一緒に引き揚げられたんですか。

田部：家族。父は残るつつたけどね。そんなこと許されんとかいってね、母が。まあ父は残ったほうが楽しかったと思うよ。

北原：それが昭和21年の何月でしたか。

田部：そうそう、4月。4月8日でしたね。寒かったね。鳥栖についた時には雪が降ってたよ。こんな寒いところで暮らせない、って思った。

北原：出港はキールン（基隆）ですか。

田部：キールン(基隆)か。あのね、巡洋艦がね、たった1隻か2隻残ったの。それを使ったのよ、台東庁は。だからもう揺れて揺れて、速いから。私もう「死ぬ、死ぬ」って言ってからね、叫び廻ったのよ。誰かがおじさんがね、あんまり私が苦しむから、甲板に連れて行ってくれたんですよ。甲板に出たとたん、ずっと気分が良くなって。酸欠ですかね。それ以来、船が嫌い。海が嫌い、水が嫌い、船が嫌い。水難の相があるっていわれてね、19歳で死ぬとかいわれて。本当に水難はその2回ぐらい遭ったしね。

…… こんなこと話したってしょうがないですよ。もうちょっとなんか、あの戦争反対のメッセージを出しますよ。だからどんなことして、どんな原爆を持とうがどうしようがね、日本は負けます。どこも戦争しても負けます。私が予言します。負けても良いならしなさい。今度負けたら国はないですよ。

張：なぜ負けると……

田部：負けますよ。戦う気持ちのある人がいますか、日本に。誰もいませんよ。逃げるところもないですよ、ねえ周囲が海だから。だから私はアメリカに移住するって言ってたのよ。1千万貯めてね行こうと思ってたの。でも1千万がなかなか貯まらないのね。とにかく、永久ビザですか、労働ビザでも、市民権、これを取る。何のためっていうけど、いや取ることが意味がある。取ることが私のパフォーマンスなんだってね、頑張ってたけど。若い子が取ることからって、私ついていったことあるの弁護士のところ。そうしたらね、その人が「貴女のほうがすぐに取れますよ」って言った。こっちの新聞にも載ってるし。こっちですっと個展してるし、実績があるから。あなたはすぐ取れますよ。あの時にすぐ頼めば良かった。すぐ、「そうですか、じゃあお願いします」って書類をぱっと出してたら、取れたのよ。今はこんな帯状疱疹になったりするとですよ、健康に自信もないわね。61歳から行ったんですよ13年間ね、ずっと。ニューヨーク、ワシントン、アディロンダック、パリ、ブルゴイユなど。

北原：ところでお父様とお母様と、お姉様と4人で引き揚げられたんですか。

田部：兄はね、予科練に行っただからこっちで帰ってきました。特攻隊で、もう飛行機がないんだって、行った時には。あの人もラッキーなのよ。なんでも1人同僚が肺炎になるんですよ。間質性肺炎とかいって、で、その看病を兄がして自分もうつたんですよ肺炎に。それで飛べなかったんですよ。

北原：それはどこですか。

田部：江田島の辺じゃないですか。それでその友達も肺炎で死んだんだって。でもうちの兄は助かったの。体操してましたからね、器械体操。大車輪とか。だから体が強いんですよ。それで生き延びて、最後は佐世保の通信隊かなんかにね、行って、毛布1枚もらって帰ってきたの。

北原：では日本でまた再会されるわけですか。

田部：うん。

北原：それで、船で大変な目に遭いながら引き揚げてきて、次にはどこに行かれたんですか。

田部：母の実家に引き揚げてきたんですけどね、そこからだいたい近いところにあるのよ、女学校。でも母はね教育ママでね、浮羽高等女学校が名門だからって言って、そこに（入りました）。浮羽高等女学校は、あの辺で有名なんですよ。それね、私は平気で2年に編入しましたけどね。うちのおじさんが政治をやっていたからおじさんの知り合いで稲富隆人っていう、民社党の代議士に母が頼みにいって。黒塗りの自動車で乗り付けたんですよ、浮羽高等女学校に。そして簡単なテストがあって、テストは100点とって。満州とか朝鮮から引き揚げてきた人は1級下がったんですよ。編入の時に。私はそのまんま2年生になったの。

北原：なんのテストだったんですか。

田部：数学と英語だったの。こっちより向こうのほうが進んでたから。だから、すごく簡単ですよ。一次関数ぐらいのもので。

北原：台湾では小学校は国民学校ですか。

田部：いや、もう女学校入ってました。

北原：小学校をでて、それから台東高女ですか……

田部：そうそう、台東高女。

北原：の1年生だったんですね。

田部：2年生になってた。で、2年の時に帰ってきたから2年生に編入したの。そして学制改革があったんですよ。それで高等学校になって、2校あるんですよ浮羽は、東校と西校。で東校は家庭科みたいなものになって、西校は受験校になったの。今もそうですけど。その西校に私達のクラスだけ行ったの、受験クラスだけ。私も負けん気が強いから、成績だけは良いんですよ。通信簿見たらわかるんだけど。だから学芸大学、今の教育大学、推薦で行けるよって言われてたんです。担任が国語の先生で、私はとてもかわいがってもらってたからね。文学趣味はここから来てるんです。でも私、先生になるのはどうも好きじゃなかったのね。そしてあの頃まで、あそこ（教育大）を出たら、2年ぐらいお礼奉公をせんといかんかったの。それが嫌で断ったんですよ。早く勤めに出て親を助けんとね、飢え死にしちゃうからね。働いたの。

北原：それは何歳ですか。

田部：だからそれ、18歳からずっと働いてるのよ。ちょうど香蘭のなんか専門学校の証書が出てきたの。香蘭学院（現香蘭女学院）で今もありますよ、香蘭短期大学（香蘭女子短期大学）とか。あそこがまだ夜間部もしてた頃。出てきとったよ。そんなの忘れてたよ。

小勝：（田部さんが用意されていた卒業証書などの資料を見ながら）あ、本当だ出てきました香蘭女学院。

田部：そうそんなのがあるって、知らなかった。

小勝：これは高校を出た後に行かれたんですか。

田部：そうそう。で自分のブレザーとか全部縫ってましたよ。

北原：洋裁学校みたいなものなんですか。

田部：そうです。買うお金がないからね、生地だけ買ってくればぱっとできるでしょう。それでも泥棒が盗っていくんですから。そんな貧しい時代ですよ、戦後の。

北原：物盗りですか。

田部：泥棒に2回入られたよ。緞子でつくったスーツもね、ツイードのスーツもね、コートもねみんな取られたの。よっぽど洋裁上手だったんだよね（笑）、おかしいね。

中嶋：（香蘭学院の卒業証書を見ながら）こっちの卒業証書と、こっちの卒業証書は…… 2つある。

小勝：昭和28年10月と昭和29年3月、2つある。

田部：だから出て（卒業して）、また行ったのよ。

中嶋：レディドレス香蘭女学院に2回行かれたということですか。

田部：ドレスメーカーと、2回行ったのよ。

小勝：こちらは夜間裁断科。

田部：そうですそうです。働きながら行ってるのよ。

小勝：働くというのは、すでに岩田屋に入られて……（注：岩田屋とは福岡市の老舗百貨店。戦中戦後、美術展の会場として頻繁に使用された）

田部：いや岩田屋じゃなくてね、その前にちょっと知り合いの人を介して、石炭会社に行っていましたよ。2年。

張：石炭会社。

田部：うん、それはね、面白かった。

北原：ちょっと待ってください。18歳で、学校を卒業して。

田部：そうそう、2年ぐらいね石炭会社で勤めて、二十歳の時に岩田屋に入ったの。最初はね、臨時雇いで入ったけど、1年ぐらいですぐ本社員になって。

北原：石炭会社でどんなお仕事をされていたんですか。福岡市内ですか。

田部：うん、石炭の販売ね。本社の頃はね、銀行のね、その会社ももうすぐ潰れそうでね、あっちのお金をこっちに持って行って、こっちのお金をこっちに持っていくっていう、そういう仕事よ。私銀行の電話番号を全部覚えてんの。「石橋（田部氏の旧姓）、富士銀行」「はい、何番です」電話帳を引かんでいいのよ。特技よ。「行ってきてー」って、30万からを、あっちから出してこっちに入れる仕事。でとうとう潰れたの。でどうしようかと思ったら、兄がちょうど帰ってきて、その岩田屋の人事課にいたの。行徳（後に三重野）栄子っていう後に参議院議員になった人と友達だったの、兄が。それで入れてもらったんですよ。で、1年間の臨時職員をして、その間にいろいろ功績をあげてね、検定に通ったり1万円の商品券の不正使用を見つけたりね、勤が良いからね、すぐわかる。賞状があったでしょう。

小勝：表彰状、「勤務中盗難商品券の不正使用…… 金一封を贈る」。

一同：（笑）

田部：おかしいね（笑）。勤が働いてね。「ちょっと待って下さい」って言ってねレジのところで。あの、登録してあるんですよ、不正番号。すぐ保安科に連絡して、ぱっと捕まえて。

小勝：岩田屋との労働契約書も出てきた。

田部：ね、それが私面白かった。労働契約書まで出てきた。だんだん紙が上等になったっていうか。あの国民学校のものは、だんだんと紙がボロになってるね。薄く。やっぱり国家のあれを反映してます。岩田屋はちゃんとしてましたよね。済美会という社員のための、教養を高める（サークルも持っていたり）ね。私は美術とフランス語（のサークル）とを取ったの。

北原：それは岩田屋がお金を出してくれて、習えるんですか。

田部：そうそう、そうです。フランス語の一番最初は、「マンショーン、マンショーン」っていうの、フランスの国歌を習いました。

北原：岩田屋って戦時中も戦争画の展覧会が廻ったりしているんですけれども。

田部：そうですよ。

北原：どんな位置づけにあったんですか。岩田屋っていうのは。

田部：百貨店で展覧会があるのは、常識だった。

北原：ええ、だから、民間の美術館みたいな感じですか。

田部：そうそう。地方では、展覧会は地方のデパートに廻るんですよ、どこでも。美術館がない時代なので、デパートでやってたんです。「西部女性展」も岩田屋の7階か8階で。

小勝：「アンフォルメル展」も、岩田屋ですよ、確か。

田部：アンデパンダン？ グループQ？

小勝：グループQではなく、海外の……

田部：え、ほんと？（ジョルジュ・）マチウ（Georges Mathieu 1921-2012）が来た時？

小勝：そうそう。それが、こっちにも回ってきてるはずなんです。

田部：へえ、それは知らん。

小勝：そうですか、「世界今日の美術展」岩田屋ホール。ちょっと話が飛んじゃいましたけれど。1957年。

田部：そういえば、そんな気も、してきたな。

小勝：グループQがやった年と、同じ年ですね。それはまた、明日詳しくお伺いしたいと思ってたんですが、ま、そこまでいなくても、岩田屋に入った頃に戻り……

北原：その頃は、岩田屋ではどういうお仕事をされていたんですか。

田部：売り子ですよ。1階のスカーフとかマフラーとか傘とかなんとかの。だからマフラーとかは、絵を描くから、売れるのを仕入れるのがうまいから、全部任せられて。

北原：仕入れまでやってたんですか。

田部：だから仕入れまで任せられて、自分が仕入れたものは全部売る、という。絶対に下に残さないように、毎日全部入れかえて、やってましたね。

中嶋：その頃まだ50年代ですけど、売れましたか。

田部：スカーフは良い柄だったよ、あの頃のほうが。

小勝：そのへんはどういう人が、やっぱり多少お金持ちが買うんですか。

田部：いや、そんなのは、普通の人が来て買いましたよ。

中嶋：岩田屋というのは、その地域で一番大きなデパートなんですね。

田部：そうそう、そうだった。

北原：今もありますよね。

田部：いや、今は潰れてね、社長が私財を投げ打って、再興したからね、それに感動した九電と西部ガスが、

あの場所を使わせてやってるのよ。本館の方は NTT でしたから。それじゃあまりにもかわいそうってね、したんですけど。一番始めは、社長は中牟田喜平衛で次が喜一郎で、次の社長がボンボンだったらいいですよ。喜一郎さんの時に私の同僚の、吉増、上野、あともう 1 人、なんだったっけな、取締役の息子。あの 3 人が 3 人組で。吉増は九大で、マルクスか何かを学んだ人で、なんでも私はその人たちに相談していたんですけど、組合のこととかね。この 3 人がブレインでいる間は大丈夫だったの、潰れんで。その社長が、持ち上げるお世辞マンだけにしたの。3 人も切ったの。そうしたら潰れたのよ。ぱっと。見事に。

中嶋：その 3 人の人たちが、やはりサークル活動とか美術とか、組合の活動に……

田部：そうそう、組合の活動も、それは第 2 組合ですけどね、御用組合のほう。第 1 組合は共産党系だったからね。

中嶋：組合が 2 つあったんですね。

田部：組合員もどんどんもう減っちゃって、最後はもう 10 人ぐらい。そこで、まだどっかに写真があったけども、八柄さんという人が、あの共産党でやってたけれど、あの人があの定年と同時に死んじゃったのよ。この茶山四丁目にいた古賀さんという人もずっと、なぜかあの人も残ってたんだけど、あの人も割と早く死んじゃったのよ。

北原：明日、多分もう少しこの辺りから話が続くと思うんですけども、今日は台湾での生い立ちとか、育ったところとかを詳しく教えていただいて、すごく面白かったのですが、その時代のことというのは、ご自分が作品を作る中で、なにかヒントになったりとか、なにかあるんでしょうか…… あんまり関係ないですか。

田部：りんごぐらいでしょう。りんごの箱から出てくる鮮烈な印象が。だからポップアートをするならりんごよね、と。迷いもなく。みかんでもない、バナナでもない。りんごしかないんですよ、私の中で。生来の楽天性は台湾ですね。引き揚げて来た頃は、台湾ボケって言われてましたから。

北原：それは 1 年に 1 回くらい送ってきていた、りんごですよ。

田部：そうそう。りんごの美しさというのはね、味は知らないよ？ 味はもっと美味しいのがいっぱいある、台湾でもマンゴーとか釈迦頭とか、釈迦頭は美味しい。うちの塀の上を伝っていったら、そこでちぎれるのよ。これぐらいの塀をうまく、ととととと行けるのよね、子どもだから。

張：台東が一番有名な産地で、あとで写真見せます。

田部：それを香港で見つけたのよね。「あ、釈迦頭がある」とか言ってすぐ買ったのよ。それで冷蔵庫に入れとこうねって言って。そして忘れて帰ってきたの。食べるの忘れて帰ってきて、飛行機の中で「あ、釈迦頭忘れた」って。食べようって言って買ったのにね、結局は食べたことないわよ私釈迦頭、帰ってきて以来。

張：私今度、こっそり持って帰ります（笑）。

田部：とにかくうちはパイヤもあったの。庭にざーっと。今みたいにこんな、ちゃん切っていないですよ、背が高いから棹に袋をつけて、パクっパクってとるのよね。

張：その時は官舎街はやっぱり、みんな果物とか作っていたんですか。

田部：いやそんなのあるの、うちくらいよ。だからもう、石橋さんのところのバナナがいちばん美味しいって
いってね、兵隊さんが。「持ってきて、持ってきて」って言ってた。なったまま、パシッパシッと割れるのよね、
皮が。とにかく私はね、引き揚げてきて3年くらい帰ってきてね、バナナは口に入らなかった。不味くて不味
くてね。

北原：台湾バナナですよ。

中嶋：小っちゃいですよ。

田部：あんなの嘘ですよ。小さいうちにとるの。そして蒸らすの。本当に野生だったらこんなに大きくなるの。
うちは鶏小屋の横にあったからね。肥料はいっぱいある。

小勝：今でも台湾バナナのほうが高いですよものね。

田部：そうですね。

小勝：台湾では産業としてバナナをやってるんですか。

張：はい。やってます。結構重要な。

田部：あれもね、パイナップル。当時オンライって言ってたけど。

張：パイナップル。その時代は特に、パイナップルとバナナが一番重要な経済的な……

田部：パパイヤは傷むからね。あんまり、こう、輸出とかは、向かないよね。とにかく美味しいのよ、うちの
パパイヤは。熟れるまで置いてるから、とろけるように。オレンジ色の。

小勝：いろいろな美味しいものがあったも、やっぱり画材としてはりんごというのが……

田部：そうそうそう。りんご。絶対りんごだね。63年からりんごですもん。

北原：味というよりも、なんなんですか。日本から来たということがすごく嬉しかったわけですか。

田部：いや、そういうね意識っていうものは、私はだいたいにおいて予感はずいぶん鋭いけど、あの自覚がないの、何
事もね。

中嶋：田部さんの記憶ってビジュアルですよ。台湾のほうがいろいろ色彩も豊かな果物の色ですか、先住
民族のお洋服の色とか、色彩の鮮やかなところで育てられて、日本に帰ってきてからがっかりされませんでした
か。

田部：がっかりしたね、まず、食い物が無いのががっかり。こんなところ来るんじゃないかって。台湾にいて、
弁護士になっとけば良かった。小さい時から正義感が強く、弁が立つので弁護士になろうと思っていたので。

北原：台湾時代で辛かったこととか、そういうご記憶ってあんまり無いんですか。

田部：ん、辛かったこと。

北原：ええ、嫌だったこと。

田部：辛かったことは。台湾はね。毎日楽しかったし…………。

小勝：これを読むとね、田部さんの全貌がよくわかるんですよ。（注：田部光子『田部光子 TABE MITSUKO Recent Works』ギャラリーとわーる発行、2002年）

張：（アトリエにある作品を見て）これ買いたい。私、いつか買おうと思って。その、アフリカ、この間お聞きした……

田部：そうなのよ、アフリカは（主題として）自然に出てきてるのよ、もう無意識よなんでも。無意識で、宗教と民俗が人々を不幸にするって思いついて。コンゴだけきちっと描いてね。アフリカの地図かいてさ。「喜望峰」だもん。「きぼう」の「き」が違うのよね。喜ぶっていう字。

中嶋：一端時間を戻してもよいですか。

田部：もう台湾はいいよ、大概で。

北原：あの、話がいろいろ展開したので……ここで切りますか。

小勝：そうですね今日はもう4時半だから。

田部：いや、あのいいですよ、まだ。ごゆっくりどうぞ。なんか、嫁さんが作ってますから。

北原：明日が長いので、今日聞ける話は……

中嶋：じゃ、あと30分くらい。

小勝：じゃ、中嶋さんが始めます……

中嶋：お願いします。じゃあまず美術に関心を抱いたきっかけのようなものからなんですけれども、小学校の頃から絵を描くのがお上手だったという。

田部：いや、それはだから、それは交換日記とかね、してましたからね。好きでは……嫌いではなかったけど、高校の時に私よりも巧いのがいたのよ。木を描くのが抜群にうまいの。

中嶋：じゃあそれは、台湾の小学校でも、こっちに引き揚げて来てからの学校でも、図工や美術の授業というのはありましたか。

田部：ありましたよ。

中嶋：お好きでしたか。

田部：特別に好きでは無いと思うね、だけど、だからほら習字と美術と音楽と、どれをとっても良かったの。

中嶋：で、美術をとった。

田部：だから3年間で、一つずつとったの。欲張りだから。

中嶋：美術はどんな、水彩画とかをやりましたか。

田部：えーっとね、美術は、静物画とかそんな面白くない授業だったよ。

中嶋：結構伝統的なものを習うんですね。

田部：うん。

中嶋：そうではないような前衛的な絵画に触れられたのが、その岩田屋での……

田部：そうですね。九州派…… あれは桜井（孝身、1928-）さんの大声が階段中間こえていて、なんだろこの大声はと思って入っていったところが、桜井さんの展覧会だったの。

中嶋：岩田屋で桜井さんの展覧会があったんですね。

田部：踊り場で、あの、小さな画廊がありましたからね。

中嶋：岩田屋には、ホール以外に画廊もあるんですね。

田部：後で出来たんですよ、階段の所に。ちょっと小さいけどね。

中嶋：岩田屋では、そのサークル活動、これは済美会（さいびかい）というのがあったと伺っているのですが。

田部：済美会で絵画部に入ったというところで、やっぱり興味があったということなんでしょうね。油絵の具とかも、兄が置いていたりしててね、兄もその、兄は早稲田の政経で、代議士になる夢があって、誰かの秘書になるはずだったんですよ。そしたら結核になって、その結核になったのが石田さんとかいって、第一美術協会の会長かなんかの家に下宿してて、「お前もう、療養中に絵でも描かんか」って言われて、絵を描き始めたのが始まり。

中嶋：東京で和美さん（田部氏の兄の名）は絵を始められたんですか。

田部：そうそう。で、時々帰ってきてね、どっかスケッチに行ったりして。「お前は色彩感覚が優れているとか（私に）言ってね。俺よりすごいとか言ってましたよ。

中嶋：一緒に風景画とかを描きに行かれてたんですね。

田部：あっちは男だからさ、やっぱり真面目に描くっていうかね。あの、色彩感覚が悪いんだって、自分は。

中嶋：もっと独創的な色彩感覚で絵を描かれていたんですね。その頃田部さんはおいくつくらい、高校生ですか。

田部：いや、もうまだ、20から26歳まで（岩田屋に）いたからね。その間ですよ。

小勝：ちょっと、そのお話なんですけれども。その前に、田部さんこの本（注：田部光子『着信人払い地球郵便局』葦書房、1984年）に書いていらっしゃるが……

田部：うん、『フクニチ（新聞）』に連載したの。当時の文化部長の深野治さんの推薦で。

小勝：ええ、「引き揚げて高校に行ったときに」

田部：高校？

小勝：高校。それで、その「浮羽高校に行ったときに、吉井町在住の画家尾花さん、尾花成春さん」

田部：そうそうそう、九州派。成春。まだ生きてるよ。

小勝：「その『ともだち座』という演劇をしていた」。

田部：それが鳥越俊太郎のお父さんよ。監督とかいろいろしたのが。書いてないよね私。

小勝：書いてないですね。「それに刺激されて、『アラジンの不思議なランプ』を脚色衣装装置等、全部を自分たちで整え、リアカーにつんで、それで中学校の講堂で公演をして廻った」。これもまず、最初の美術、芸術体験ではないか、と。

田部：そうですね、本格的な美術体験というか、あの、シナリオも書きましたからね。

中嶋：総合プロデュースですね。

田部：そしてこの1人2役もしてね。あの、もう、ものすごい巧いって褒められたの。

小勝：出演もしたんですか。

田部：演技が。じいさん役から、門番から、モンナバナナ主役まで何でもこなしてましたよ。学園祭で。

小勝：そもそもちょっとまた前後しちゃうんですが、台湾の女学校時代でしたっけ、交換ノートみたいなものをしていたっておっしゃってましたね。

田部：それを捜すっていったでしょう、もうあるところをみたら無いのよ。もう一箇所そこに、見当があるけれど。

小勝：それは台湾時代ですか。

田部：そうです、台湾時代。

小勝：そこに詩を書いたり、絵を描いたりしてた。

田部：下手な絵よ（笑）。

中嶋：紙や画材というのは、結構ちゃんと手に入った……

田部：だから紙がボロボロだから面白いのよ。戦争中のボロボロの紙に描くの。あのノートを一生懸命見つけてるのよ、今。

小勝：その女学校時代のお友達というのは、日本人なんですか。

田部：向こうでしょ。うん、全部日本人。

小勝：その台東高女。

田部：そうそうそうそう。いや、台東小学校かな。高女ではそんな余裕は無かったもんね。

小勝：そうですよね。敗戦ですもんね

田部：小学校。本当にそのね、あの忘れられないのはね、あの、草刈りとか行くんですよ。奉仕作業とかいってね、動員されるわけですよ。なぜか先生がいないんですよ。結局私が責任者になるでしょう。そしたらね、鎌で安永さんが、ここをざっくり切ったの。骨が見えるほど。もうそんなのも全部私がせんといかんのよ。で、私になんか幸いなことに、布の帽子を被っていったから、その帽子で手がしびれて手が折れるかと思うくらい止血して、そしてずっと泣きながら大きな道を歩いてたの。そうしたら兵隊さんのトラックが来てね「どうしたんか」っていってね、もう「怪我してるんです、助けて下さい」って言ったのよ。そうしたら「わかった、僕たちが病院に連れて行くから、あんたは帰っていい」って言われて、ほっとしたの。ほんとうに運が良かったと、もうちょっと歩いたらもう手がしびれて、あの人は大出血で死んでるよ。それであとからね、あの止血が非常に良かったって、あれがなかったら助からなかったかも知れないっていう言付けがあったって、兵隊さんから。それで私も満足したんですけどね。

中嶋：命の恩人ですね。

田部：そういうこともあったの。

北原：小学校時代から、絵を描くのが好きだったんですか。

田部：好きですね。

北原：いつ頃から描き始めていたんですか。

田部：まあ、どっちかっていえば文学が好きね。講談全集ってこんなのあったでしょう。ずらーっとうちの父が（持っている）。

中嶋：それをお持ちだった方多いですね。

田部：年配の人がね。ベストセラーなのよね、あれ。それと銭形平次。その講談全集、私が学校に行けんくなって空襲で。全部読むんだって、父親が心配してた。「あんなもん、読んで良いのかね、子どもが」って言って心配してたんだって。

北原：特に何が好きですか。

田部：「天野屋利兵衛は男でござる」（笑）。忠臣蔵よ。

小勝：忠臣蔵ね。

田部：商売人なのにね、武士より堅いの。絶対に大石内蔵助に頼まれたっていうのを言わないんですよ。どんな拷問にあってもね。「天野屋利兵衛は男でござる」。

中嶋：そういうものを読まれて育て。

田部：だから私の文章はね、リズムが良いんです。

中嶋：そうですね。

田部：よく考えたら、これは講談からきてるんとかうがかな。講談口調だからね、リズムがいいって、すごく読みやすいっていわれるんのが、やっとわかったんですよ。

中嶋：文化的な家庭で育てられたんですね。

田部：家庭的にはね、結構レベル高かったと思うよ。父もほら、何でも物好きで凝り性で。母はもうほら、やりだしたらもう帯とかね一晩にこんなにつくるんだよね。それもね、絹の糸でこうダイヤ形にして、ここにひらひらひらひらとつけるわけですよ。そんないらんことせんで良いのよ。ただ渡しとけばいいのに。それがしたいの。だから毎朝おきてね、綺麗ねーって、私言ってた。美しいものを見るのが好きかな。

中嶋：これも金色ですものね（注：金箔で彩色されたりんごの作品《健康作品》（2001年）を指して）。

田部：そうそう。これまた面白いとよ。個展会場に誰かがぴゅーっと思ってきてね、ギャラリーとわーる、「これは凄い。これは東向きに掛けたら何でも手に入る」っていうのよ、あなたは何をされてる方ですかっていったら、「私はですね、風水をやっている者です」って。何でも手に入るなら、やっぱり健康やね。それで《健康作品》にした。もうお金なんかあったって健康が無ければなんもならん。でも実績あるのよ。この前ね、白寿で亡くなったの。これまだ若い頃買ってくれとった方が。白寿まで生きたって。やったーって。

中嶋：それは、置いておいたほうがいいですね。

田部：いいですよ。お金があったら、買ってね（笑）。100まで生きるよ。それでも私が死んだらどうしようかと思ってね。このまえ1週間心配したの。臍臓が、臍臓は助からんけんねって思ってさ（笑）。

北原：4つあるから、400才まで。

田部：半額にしますよ。

中嶋：お父様も写真をやられていましたよね。

田部：巧いですよ。職業的な三脚つきの……

中嶋：写真機を使ってみたり。

田部：写真機もある…… 暗室までつくるんだから。あの人は凝り出したら凄い。ただ俳句だけは上手にならんかったね。帰ってきて俳句をねよく、『朝倉』（注：朝倉俳句会の機関誌）とかいうのに投稿してたけどね。なかなか入選しないわけよ。入選したら喜んでね、送ってきてた。山が好きで山歩きが。古処山（こしょさん）とか、なんたらかんたら歩いて、あの、うちのあそこの紅葉とか大きくなっての、あれとかみんな父が持ってきたの。60年70年経ってる。だから私紅葉が好きなんです。文学趣味だね、あの人。私が原稿代とかもらったらすぐにあげるのよ、お金を。喜んでね。買う本は徳川家康とかさ、しょうもない本買うけどさ、本を買うということは良いじゃないですか。

中嶋：じゃ、ご家族も田部先生が画家になることについては、特に反対はされたりはしなかったんですか。

田部：父は反対してましたね。早くよかところに嫁に行けって。こんなもらい手がおるわけないやろって。あの、見合いするぐらいなら私は一生独身で暮らすよって、嘯いてましたから。

小勝：でもお兄さんがまず最初に画家になったわけですか。

田部：そうですね。なんとか文部大臣賞とかとってるんですよ。だから未だにね、前衛で頑張ってたらね、良かったんですよ。それがねある日、あの人凝り性で信楽に凝ったんですよ。信楽焼。そして私が行ったときちょうど、耳の不自由な人の人を連れてきて窯を作らせてたの。窯まで作って、したら腰を痛めてね、死にそうになったんですよ。その時に大塚なんとかっていう、漢方医の有名な人がおるでしょう（大塚敬節）、その息子さんと、北里大学の教授（大塚恭男）。あの人から助けてもらったんです、漢方で。それ以来は、世の中の無常、命の大切さと「あんな前衛の絵を描いていてもつまらん」とか、なんかいろいろ考えて、仏画に転向したの。だから私ともあんまり話が合わなくなったの。

中嶋：その後は会わなくなってしまったんですか。

田部：うん、仏画も売れたのよ一時期は。あの景気の良い時は。70万80万って。私なんかゼロで頑張ったんですけど。「人生は投機である」サルトルが言ってますよね。未来への投機だって、言ってますでしょ。それですよ。自分がなりたいものにしかねないと。意志ではなくて、なりたいものになるという実存主義ですね。実存主義に凝ってたから。だから、やっぱり前衛で行きたいと思ったら、徹底して前衛で行くという、それはサルトルから学んだんです。

小勝：そのサルトルは、やっぱり岩田屋のサークルのフランス語とか……

田部：サークルよりもね、組合のことで役に立ったね、私。どっちだっていいんだという、第1だろうと第2だろうと、どっちだっていいんだっていうふうなところから発想していくからね、あの第1からは嫌われるわけ。で、もううるさいから、辞めた。辞めた一って。組合長が裏切るよって聞いたの、私。三重野さんの弟から。「田部さん、よく気をつけとき。三重野組合長が裏切るよ」って。そしたら、ほんとに彼が会社と手を組んでね、たった480円で手を打ったんですよ。

小勝：岩田屋争議の時ですね。

田部：それで、彼はよう見とったね、と思うけど、その姉ちゃんが三重野さんと結婚したのよ。あの人はね堤さんだったのよ。最初行徳さんで、それから堤さんというね、穏やかな教授みたいな人が良く会いに来てましたよ。その人と別れて、あのチビの嫌な三重野と結婚したの。

小勝：お姉さんがですか。

田部：うんお姉さん、行徳さん。行徳さんの弟が私に「石橋さん、よう覚えとき、あいつが裏切りよる」って私に囁いたの。よく見とったな、と思って。

北原：それは第1組合の。

田部：うん。それで辞めて。だから第2組合、向こうが私をね、中牟田和夫さんとかみんなかわいがってくれて、人事課長もボーナスっていったらAクラスをもらってたから。と、組合のほうは、私を大事にしないでしょ。だから三重野さんから嫌われとったもん、私。だからそんなこんまで合わないで、「どっちにも行けんくなったね、じゃ辞めよう」って言って、辞めたの。

小勝：組合を辞めたんですか。

田部：岩田屋そのものを辞めたの。

北原：岩田屋そのものを。ああ、そうなんですか。第1組合が主流派の組合で、第2組合が……

田部：だけどあつという間に50人に減るのよ、第2が出来たら。西日日本新聞社なんて8つ出来たんです、組合が。編集から記者からなんから、広告から何から、ぜんぶ部門毎に8つも出来たの。

中嶋：そんなにあったんですか。

田部：なんにもならないのよ、組合に忠義立てして共産党に入ったってしょうがないでしょう。あ、この中（注：「九州派」展カタログ、福岡市美術館、1988年）にね、九州派は学歴が低くてどうのこうのって出てきます、2ヶ所。あの黒田(雷児)さん。だけど、私はね学歴コンプレックスゼロです。私たちが大学に行く頃に行ったらね、えっと、共産党の主流派と国際派でね、しのぎを削ってました。殺し合いの。どうせそれに私巻き込まれるじゃないですか。そしたらリンチ受けるか共産党から立候補するか。そんな人生嫌ですよ、私。もうサルトルに違反しますよ。だからね、なんともないのよ。学歴コンプレックスゼロです。そういう気持ちもわかって欲しいよね。あの人東大出てるからさ、東大出ない人はみんな学歴コンプレックスと思い込んでるのかな

と。一度酒呑んでゆっくり私のこの気持ちを聞いて欲しい。私の息子は東大を出てるし。

中嶋：コンプレックスとは書いてなかったですけど、多分。

田部：それは書かんですよ。だけど学歴が低くて何回書いてるんですか。88年にも書いてる。

中嶋：ただ、東京との違いを書きたかった……

小勝：つまり、他のグループの画家たちといえますか前衛の人たちが、大学生のぼんぼんで……

中嶋：頭でっかちだったのに対して、九州派は……

小勝：(東京の前衛たちは)豊かな生活の中で、こう……

中嶋：実存的だと、生活に即した美学を持っているということなのでは。あの、そこでお伺いしたいんですけど。1958年の1月に岩田屋を退職され3月にご結婚されてるのですが、田部健二さんと。

田部：田部健二さんね、声がよくてね。うっとりする声ですね。

小勝：どこで知り合ったんですか。

田部：私が仲良くしてた女の友人がおるんですよ。で、その友人が結婚したの。その結婚した男の方の知り合い、うちの旦那だったの。私とその女の人の友達で、新所帯をもったから2人で加勢にいったの、で、いろいろとお掃除したり加勢して、そこで出会ったの。

小勝：そうなんですか、それでは岩田屋とはなんの関係もない。

田部：なんの関係も無い。私の友達がね、男癖が悪いから、最後の最後まで内緒にしとったの、結婚すること。すぐ邪魔するから。面白い趣味の人がいるんですよ、世の中には。人のものっていったら欲しがるの。岩田屋にたくさんいましたから。結婚するまで内緒にしてたの。

中嶋：岩田屋を退職する前からお知り合いだったんですね。

田部：1年前くらいにね。

中嶋：恋愛結婚ですね。

田部：もちろんですよ、恋愛結婚以外しませんよ。見合い結婚なんてしません、恥ですよ。

中嶋：どのようなお仕事をなさってましたか。

田部：新聞社の広告局。

中嶋：新聞社の方なんですね。

小勝：西日本ですか。

田部：いや、フクニチ新聞。

小勝：ああ、フクニチの方なんですね。

田部：後にフクニチ広告社。で、映画関係をしてたんですよ、一手に。あの、だからそのお客さんをもって会社を作って独立したの。それで私は左うちわになったの。そしたらその、あの、ちょうど高度経済、バブルがきて、もう株も上手だしあの人。花王の株、無償株で10回位海外旅行に行った。私が全部使ってやったから、よかったらうって言ってんの。全部ここ（頭）に入っとるよ。

中嶋：海外旅行はどこに行かれました。

田部：ヨーロッパですね、だいたい。観光はヨーロッパですからね、パリとかイギリスとかイタリアとか。イタリア、オランダは何遍もいった。スペインもいったし。

小勝：それは旦那さんと。

田部：いや、いかん。私1人。友達と。お医者さんの奥さん。循環器センターの総長夫人と行くのね。あの人、ご主人と行ったら全部無料ですよ、WHOの理事だからね。でも途中で別れたら全部自分で出さないかんのにね、ちゃんと私のプランでね、ホテルのランク下げよ、あの人達はもうファーストクラスだからね、エクセシソワールとかいうようなホテルにね、泊まるでしょう、「私はそんなところ泊まれんよ、私はボロホテルだから朝迎えに来て」って言ってね、別の所に泊まるの。でもご主人もちゃーんとしてくれて、途中でご主人とバイバイして、私とスコットランドの果てまで行ったね。

中嶋：田部健二さんは、美術は……

田部：上手ですよ。絵描きでないほうが上手な人おるじゃない、こうラフスケッチとか、あの。広告の時にねもう、広告をここに何々の写真を入れてっていうラフスケッチがものすごいはやいの。

中嶋：田部先生が絵画教室を始められたのは……

田部：私がお金に困って、九州派の高い出品料を払えないからね。

小勝：それはじゃあ、旦那さんからもらわないで自分の絵画教室で出品料を払われたんですか。

田部：あ、あの人はまだ勤めている時は、給料が安いからね。私のほうが高給取りで、毎日ビーフステーキ食べて。

小勝：岩田屋ではなく。

中嶋：もう岩田屋じゃなくて、絵画教室ですね。

田部：岩田屋はもう辞めてるよ、辞めて良かったのよ。240人も教えてましたから。いくら月謝が安くても、

それだけ教えれば何十万かになりますよ。

小勝：それは週に毎日やっていたんですか。

田部：毎日のように授業をね、子どもが帰って来るのを待ってって自転車の後ろにのせて、ばーっと走ってね、あっちのこっちの集会場を回って、教えてました。

小勝：これは、ご自宅で。

田部：これはね、40歳の時ですから、ここ（自宅のアトリエ）も開いてましたけど。ま、ある日55歳で、私はこんなことしてて、絵描きになれんと思ったんですよ。それで、全部やめたんです。主婦まで定年退職宣言して、「茶碗洗わんぞ」、もう明日から茶碗洗わんって決めたの。

中嶋：芸術活動に専念すると。

田部：そうしたら一銭も入らなくてこと、わかってるでしょう、わかってるのに経験しないとわからないの。一銭も入らんかってご覧なさい、もう貧乏もどん底ですよ。月謝は帰りに無くなるくらい無駄遣いしてましたからね。

中嶋：旦那様がサポートされてたってことですよ。

田部：旦那さんの給料は旦那さんの給料よ、ガッポガッポと。だから使うところが違うもんね、生活費。生活費は私のほうが稼いでましたよ。それで独立してから、もう辞めたんですから、良かったんです。生活には困らない。

中嶋：でもだいぶその、美術にも田部さんの活動にもご理解があったんですよ。

田部：ああ、理解はありましたね。最初からそんなやつと結婚してるんですから。覚悟して。へんちくりんの変った九州派と結婚してるんで。

小勝：最初は九州派に入る前は自由美術に出品されてたのは、やはりお兄さんが自由美術にいたっていうのがありますよね。

田部：そうですね。それで、井上長三郎（1906-1995）が時々こっちに来てましたから、会いに行ってね、そうしたら「あんたもう、(自由美術協会に)入らんね」って。「俺がいきなり会員にするけん入らんね」って言ったんですよ。

北原：井上長三郎が。

田部：大将ですよ大将。私はあの井上長三郎の絵だけは好きなの。

小勝：ちょっと前にお聞きした時に、富山妙子（1921-）さんのパートナーの人が、福岡まで会いに来てくれたって書いて下さったんですが

田部：それもあれだったんですね。それとか一木平蔵（1923-）とか。みんな来ましたよ、主だった人は。

中嶋：田部さんを誘うために。

田部：誘いに来たのか、遊びに来たのかは知らないけれど。

中嶋：九州には結構人が来てた時代ですよ。

田部：そうそう。

中嶋：あとは東京の繋がりといえば、お兄様の和美さんが、制作者懇談会にいらっしゃいましたね。

田部：そうそう。あの頃はあんまり知らないよ。うん、あの頃は私もこっちで。

中嶋：そこで針生（一郎）さんと後に知り合われるのですよね。

田部：そう、針生さんなんかをね九州派に紹介したのは兄です。

中嶋：なるほど、和美さんなんですね。

田部：だから61年の（九州派の）展覧会（「九州派展」銀座画廊、東京）の時に、針生さんとかを紹介したの、兄が。だから兄の家にみーんなで押しかけて行ってね、荻窪の団地に。（菊畑）茂久馬さん（1935-）とかみんな。

中嶋：東京で展覧会をやる時にですよ。

田部：そうそう、行ってましたよ。

中嶋：じゃあ、石橋兄妹あつての九州派ということになりますね。

田部：そう思うんだけど、恩知らずばかりで。私もそうだけど。でも茂久馬さんはとても優しい人よ。

小勝：自由美術には記録によると、57年58年59年と3回出してるんですけども……

田部：3回も出してるの、あら。

小勝：それ以後出さなくなったのは、やはり九州派に専念というか……

田部：そうそう、あの、「公募展に出しているやつは出て行け」という……

小勝：で、九州派を選んだわけですね。

田部：そうです。どっちを選ぶかだから。だから井上長三郎さんが「会員にするから入りなさい」とそういった時にね、「先生、私たちは公募展粉碎運動をしてるんですよ。なんで自由美術に入りますか」と断った。

小勝：その前に少し時間的には前に戻ると思うんですが、富山妙子さんがお好きだったというのは……

田部：それはまだ石橋光子の頃ですよ。あの、ほら、それこそ炭労の世話でそれ読んでて思い出したのよ。小勝さんの今度の全部、2、3回読んだんですけどね。炭労と岩田屋労組は仲良しだったから、炭労の命令で、「あんた絵も描くし富山さんの腰巾着をしなさい」って言われて。富山さんがインタビューや音の録音をするのに（録音機の）ハンドル回さんといかんかったからね。古い機械だったから。

小勝：では富山妙子さんを知ったのは、その時が初めてなんですか。

田部：そうです、会ったのは。

北原：絵は前から知ってたんですか。

田部：絵は一応、知ってましたよ。

小勝：それで、富山妙子さんの炭鉱の絵なんかはご覧になったわけですか。

田部：はい、見てます。でも、あんまり好きじゃない。絵づらが好きじゃない。ああいうメッセージそのものが絵に入ったのは嫌い。だから私もことばとかばんばん書きますけどね、読めないように書くしね。自分のことばです。

中嶋：では社会主義リアリズムみたいなものは、

田部：ああ、嫌い。

中嶋：面白くない、ということですね。

小勝：助手を務めた時に、富山さんとはそういう絵の話とかはしなかったんですか。

田部：いや、しないね。あの人もほら偉い人だから、私なんか小使いくらいにしか思っていないから。あんまりそんな人間的交流はなかったよ。

小勝：そうですか。やはり年代の差がありますからね。

田部：そうそう。ただこの人は手伝いに来てるって言う……

中嶋：そうなんですか。他にその頃好きなアーティストとか作家さんとか画家とかいましたか。

田部：それがね、意外と私ね、好きな作家というのがね聞かれたらいつでも困るんですよ。

中嶋：ああ、そうですか。日本でもヨーロッパでも……

田部：あ、ヨーロッパ、アメリカはおりますよ。ジャスパー・ジョーンズ（Jasper Johns, 1930-）とかね、（マーク・）ロスコ（Mark Rothko, 1903-1970）とかね。みんなゴッホ、ゴッホっていうけど、ゴッホも

好きじゃないし、ゴッホならマティスのほうが好きだし。

小勝：そうそう、深刻な絵は嫌いなんですよね。

田部：そうやろね。

小勝：暗い絵が嫌いだとおっしゃってます。

田部：暗い絵が嫌いなんかな。

小勝：赤い本（注：『田部光子 TABE MITSUKO Recent Works』ギャラリーとわーる、2002年）に書いていらっしゃる。アディロンダックの講演（注：Adirondack Community Col College における1999年の田部による講演）でおっしゃってましたけれど。

田部：でも、ロスコ好きですよ。限りなく暗いよあの方は。違うもん。命を絶つくらい暗ければ、好きなのよ。ニーチェ、ニーチェリストなら好きなのよ。

中嶋：生半可なものはダメなんですね。

田部：うん、深刻ぶったとか、その社会主義リアリズムの「これが労働者だ！」なんていうのは大嫌いね。

中嶋：やっぱり、そういうもので無いものが、その桜井さんの……

田部：桜井さんは結構そういう組合活動家だから、そういうところありますよ。だから絵はあまり好きじゃないの。ビュッフェの、えっと、ビュッフェじゃなくてあの死んだの誰でしたか。

小勝：自殺したのは（ベルナール・）ビュッフェ（1928-1999）。

田部：ビュッフェのまねのような、あのこんな手の時は良かったけどね。

中嶋：じゃ、桜井さんの岩田屋での個展が直接の原因というか……

田部：大声。個展というか、声。声がものすごいでっかいのあの人。

小勝：それは「グループQ」（注：「九州派」の前の名称）になる前の話ですよ。

田部：うん。

小勝：グループQ展は1957年ですが。

田部：もうその年に九州派は立ち上げてますよ。Qっていう字が面白いからって私が言ったんだけど、こう一筆書きで。一筆書きに凝ってるところがあるからね、この星なんかもね、小さい頃から一筆書きしてるでしょ。ユダヤじゃないのよこれ、5つだから。一筆書きですることは、どれが一筆書きで出来るかなとこつとね考えてるの。アルファベットでも。

小勝：その桜井さんの大声につられて、「グループQ」に入ったわけですか。

田部：うん。

小勝：この「18人展」というのに出してらっしゃいましたね。

田部：そうそう、出していましたね。だからそれが、版画みたいな。出したの。えっと、あれがあその絵を使ってたね。

中嶋：時間も長くなりましたので今日はここで終わりにしましょう。

一同：有り難うございました。

田部光子オーラル・ヒストリー 2010年11月29日

福岡県福岡市 田部光子氏アトリエにて

インタビュアー：張紋絹、北原恵、小勝禮子、中嶋泉

書き起こし：小師順子

中嶋：ではさっそく始めさせていただいてもよろしいでしょうか。

田部：はい。

中嶋：今日もどうぞ宜しくお願い致します。今日は栃木県立美術館の小勝禮子さんと中嶋で、作品のことなどを中心に伺いたいと思います。昨日、福岡の岩田屋の美術界における存在感の強さというか大きさということと、53年に入社されて、バイヤーや売り子などのお仕事をされながら、組合活動やサークル活動などをなさっていたというお話を伺いました。そこをちょっと整理させていただきたいのですが。済美会についてですね。もう何度かお話しされていると思うのですが、済美会というものはいつ頃出来たのでしょうか。（注：以下、田部光子氏の基礎データについては断りがないかぎりすべて、小勝禮子「田部光子試論——『前衛（九州派）』を超えて」、『美術運動史研究会ニュース』No.93、2008年5月を参照）

田部：それはわかりませんね。昔から、もうすでにありました。

中嶋：その頃、岩田屋に勤められていた頃、済美会というのは講師の方などはいらっしまったんですか。

田部：おりましたよ。あの時には二紀会の青木寿さんという人が来ていました。

中嶋：どのような作品をお作りになりましたか。

田部：その頃は台所用品の写生とか、静物画。それと、自分たちはそれでは物足りないので、ヌードモデルを雇ってヌードモデルデッサンをしたんです。それは先生と関係なく。

小勝：上田新さんという方は……

田部：同僚なんだけどね、リーダーです。大声で怒鳴るんですよ。

中嶋：他にどのような方がいらっしまったか。

田部：吉浦音雄という人と、私が大好きな原田……、なんだっけ。その人と私と2人仲良しで、いつも行き帰り一緒だね。

小勝：原田さんは女性ですか。

田部：そう、女性。あれなんていったっけ、おうちが牛とかを飼う仕事だったのよ。それで牛の絵とか上手でしたよ。

中嶋：ではいろんな人がおられたのですね。いろいろな絵が描かれて。

田部：そうそう。

中嶋：済美会の活動と組合活動というのは、なにかリンクするようなことがあったのでしょうか。

田部：無かったと思います。

中嶋：昨日、組合活動のことをお伺いしたんですけれど、1957年の岩田屋争議の時のお話ですが……

田部：ロックアウトがあったから。

中嶋：第1組合と第2組合の違いというのを、もう一度ご説明頂けないでしょうか。

田部：あれはね、第2組合にいったらまるで裏切り者のようにいわれますけどね。今考えたらなんてことないんですよね。どちらも違いはないし。

中嶋：どちらかが岩田屋さんと組んでいたのでしょうか。

田部：いえいえ、そういうことはないですね。御用組合だって行ってたけれど、一応きちっとやってたんですよ、団体交渉とか。

小勝：第2のほうですか。

田部：そう第2。それは主任以上のクラスの人が、どこでもそうですけどね、会社は。

小勝：主任以上のクラスの人が第2組合に……

田部：それでどーっと流れたんですよ、みんな流れたの、ばーっと。

小勝：第2のほうに。

田部：うん。

中嶋：そして、それが争議になったんですか。

田部：いえいえ、争議の後です。とにかく給料が安いということで、そんなに58日もロックアウトされて公園で色も真っ黒になってしたのに、上がったのはたったの480円ですよ。やっとならんでしょう。私なんかすぐに計算しちゃうの。480円、10年経って4,800円、これはやめようと思ってぱっと岩田屋をやめちゃったの。

小勝：会社を辞めたんですか。

田部：会社そのものを辞めた。

中嶋：岩田屋争議やサークル活動や組合の活動の繋がりの中から、やはり知りたいと思うのが、九州のサークル村、谷川雁さんを中心としたサークル村の方々とこれからお話を伺う九州派の方々の何人かが交流がありましたよね。

田部：ありましたよ。私もサークル村ではないけれど、大正炭鉱の座り込み、ピケに行って取材しました。

中嶋：その後も石牟礼道子さんと70年代に入ってからですよ。90年代でしたか。

田部：その時は、違う、森崎和江さんと谷川雁が結婚してたの。中間に住んでたの。それで訪ねていったんですよ。

小勝：お2人を訪ねられたんですか。

田部：そう、行ったんですよ。

小勝：それはいつ頃。

田部：大正炭鉱の争議の頃ですから、美目画廊でしたからね、1963年。美目画廊で発表したから、それを。63年か62年か。

中嶋：美目画廊で作品を発表されたんですか。

田部：九州派展があったんですよ。それちょっと銀座画廊が最後っていつているけれど、美目画廊でもう1回してます。

小勝：63年に美目画廊（九州派展、10月3-8日）っていう記録はあります。

田部：それぞれ。じゃ、それに出してます。大正炭鉱を取材に行って……

小勝：書いてあります、ここの年譜にも（注：「九州派 反芸術プロジェクト」展カタログ、福岡市美術館、1988年、p.120。小勝、田部光子試論、年譜、p.11。田部氏は、大正炭鉱の鉱夫の写真を使ったオブジェを出品した）。

田部：そうですか、それじゃ間違いない。

中嶋：その取材のために、谷川雁さんと森崎さんを訪ねられたんですか。

田部：いや、森崎さんを訪ねたわけじゃない、谷川雁さんを訪ねただけ。谷川雁さん、詩とかでね「東京へゆくな ふるさとを創れ」っていうんで、私東京行きをやめたんですよ、実は。それくらいに衝撃を与える詩なんですけど、なんか会ったら本人がつまんないんですよ。ペラペラとした不動産屋みたいに見える。いつもそう思ってたの。森崎さんのほうがずっと格が上よ。だから森崎さんとばかり話して帰ってきたのを覚えてる。

小勝：どんな話をされましたか。

田部：覚えてない。

中嶋：森崎さんはその頃、運動とエロスについての本を書かれていた頃ですね。（『闘いとエロス』 三一書房、1970年）

田部：なんかね、『非所有の所有』だったかな……何かあるよ、家に。それが一番良いね。（注：森崎和江『非所有の所有 性と階級覚え書』現代思潮社、1963年）

中嶋：そういうものを事前に読まれていたんですね。谷川雁さんの作品もご存じだったんですね。

田部：その後かもしれないね、出版は。事の前後はわからないんだけど。

中嶋：『二千年の林檎』（西日本新聞社、2001年）で書かれていたと思うんですけども、石牟礼さんと1958年に行われた九州詩画展でお会いになっているようですね。

田部：ああ、来てましたよ。

中嶋：その時にもお話などされましたか。

田部：いや。なんかね、私は石牟礼さんという人とはあまりね。一度かは、会ったよ。会ったけどね、あんまり私も好かれていないみたいで。これ、この『無劫の人』でね、嫌われたの。小学校の同級生にインタビューしたりしたので、本としては面白かったけど、丸山なんとかさんに、オシッコをひっかけっこしたとかいらんこと書いた、ということで嫌われたの、私。（河野信子・田部光子『夢劫の人 石牟礼道子の世界』藤原書店、1992年）

小勝：石牟礼さんからですか。すごく良いインタビューでしたよね。

田部：そうなの。それで最首悟さんが、私のところだけ絶賛してね。『読書新聞』に書かれたんですよ。

小勝：丸山すみさん？

田部：顔写真もね「田部さんの」ってきたのにね、藤原さんがすり替えたの、石牟礼さんの写真に。

中嶋：そうなんですか。そんな経緯があったとは。

田部：最首さんから褒められただけで私はもう満足でした。「これは絵描きの文章だ、もう全然普通の人の考えと違う」というような。どっか載ってたけどね。最首さんの『読書新聞』。

中嶋：『読書新聞』ですね、確認してみます。

田部：もう、こんなに大きく取り上げてね。河野（信子）さんなんてちょこっとだったのよ。だから河野さんが、私なんか目じゃないね、なんて言ってたけれど。全部私の記事。

中嶋：やはり、水俣に行かれた時の水俣の海の描写がとても美しくて、とても印象に残っています。

田部：それとかね、同級生にインタビューしたのが凄い、といってね。凄い、これをした人はいないって。みんな水俣に来るけれど、全部市の職員だった人がお膳立てしててね、自転車から何から全部借りてあげてたんですよ。だから何も手を煩わせなかったのは、宇井純さんと最首悟さんだけだった、と。自分で全部手配して、自分でまわられたのはこの2人だ、と。書いてるかもしれない、私。

小勝：はい、宇井純さんについては書いています、ここに（『夢劫の人』 p.88）。

田部：ね。最首さんもそう。書いたと思うの、どっかに。一行くらいですけど。そういうことは大事なことからね。そして水俣の運動している人がね、もう全然石牟礼さんは出てこんって。なにしても、田部さん、ちゃんと言って下さいっていうからね、「私という立場にないですよ、あなたが直接言いなさい」って。もうメジャーになったからね、そういうところがあるんですよ。

中嶋：なるほど。当時は谷川さんと俣野（衛）さんが……

田部：俣野？

小勝：俣野衛さんです。

田部：関係ないよ、その人。その人は、丸山豊の……

中嶋：「母音」ですね。詩のサークルに入っていた……

小勝：九州詩画展の話？

中嶋：九州詩画展ではなくて……

田部：いや、それはね。

中嶋：詩人の方ですよ。

田部：詩人ですけど、アルメの…… なんだったっけ。なんとなかっていう詩の人も多いし、それは俣野さんは関係ないと思いますよ、出しとったかもしれないけれど。

中嶋：そうですか、わかりました。

田部：だから桜井さんとか私とか九州派の連中と、詩家の各務章さんとか、今まだ生きてますよ（注：2012年に87歳で他界）。福森隆とか、映画の……「記録と芸術」の人、近藤（源三）さんとか。俣野さんは印象にないけれど、私。

中嶋：そうですか。

田部：サークル村も、あんまり関係ないんですよ、九州派は。

中嶋：そうですね。個人的な付き合いがそれぞれちょっとずつあったという感じですか。

田部：うん、桜井さんは詩を書いていたからね。それとか、河野信子さんがサークル村だったんで、そういう意味で河野さんがずっと機関誌を出していました。

中嶋：『無名通信』ですね。

田部：そう、それをずっと出してたの。

中嶋：それをずっとお読みになっていたの、依頼をなされたんですか。

田部：私は河野さんをものすごく尊敬しているの。

中嶋：河野さんとはずっとその頃からお付き合いがあったんですね。

田部：はい、私が「我が師」っていうんですよ。そうすると河野さんは「和菓子じゃないわよ」って冗談をいうんですけどね。もう、あんな素晴らしい人いないですよ。誰にでも同じ態度で、私はあの人から多くのことを学んだんです。「芸術家は傲慢になったら終わりよ」とか。

中嶋：他にどんなお話をなさいましたか。

田部：もういろいろしましたからね。

北原：ちょっとお聞きしても良いですか。さっきの谷川雁の「大地の商人」ですよ、「東京へゆくな ふるさとを創れ」という。あれで東京へ行かなくなったということですが、その詩は九州派の人たちはみんな読んでいらしたんですか。

田部：みんな読んでた。いや、みんなじゃないね。桜井さんが読めっていったから…… 読んだ人のほうが少ないね。

中嶋：あの本の装丁は、俣野さんがなされたのではなかったですか。装丁と書いてあるものと、編集と書いてあるものとがあるんですが。

田部：装丁するはずが無いですよ、俣野さんの本の装丁は私がしたんですもん。

中嶋：そうですね。俣野さんのどの本ですか。

田部：なんか『聊齋志異抄』かなんか知らんけど。そんな本の名前。中国の物語です。菊のお化けが出る、なんかあるでしょう。どっかその辺にあるけども、出せないの、あの辺にあるもの。

中嶋：後で調べてみます。ではやっぱりその頃から詩のサークルと、サークル村の周辺の人たちと九州派の人たちというのは、集団的には無いけれども交流は個人的にはあったということですか。

田部：さあ、どうですかね。私はあんまりそういうものは無かったと思うけど。むしろ影響を受けたのは私ぐらいで。

小勝：文学的趣味のある人は、桜井さんと田部さんだった、と。

田部：そうそう。桜井さんもすっかりやめたからね、詩は。絵ばっかり、一本に絞ってたでしょう。だから、そんな感じで。ジャスティン（・ジェスティ、美術史家）なんか、サークル村を一生懸命取材してたけどね。上野英信さんの奥さんとは仲が良かったんですよ、私はね。松原新一の文章教室にね、あの方は英信が亡くなられてがっかりしていたからお誘いして、そしてそこで書いたエッセイをまとめて『キジバトの記』という本を1冊出しましたよ。それこそ、松原先生のお陰で出たんですけど、その息子さんはそういうことがわからないもんだからね、「ある小さな文章教室」とか書いたので、むっとしてたのよ松原さんが。「僕が知っているのは良いけど、人が小さなとかいうな」って。

中嶋：上野さんの奥様のお名前はおわかりになりますか。

小勝：それはすぐにわかりますよ。晴子さんです（『夢劫の人』、p.173）。

田部：そんなのは関係ないんだよ、私には。だから、そこまで広げんとこう。サークル村は関係ない。

中嶋：はい。

小勝：田部さんの最初の、絵を始めた頃のお話に戻りませんか。

田部：そうそう。サークル村はまた別の取材でお願いします。

小勝：では、済美会で初めて……

田部：そう、済美会。そこもあんまり関係ないんだな、私は。

小勝：それから、地元の展覧会にいろいろとご出品なさいますよね。「福岡県美術展」とか、九州の女流でしたか。

田部：それは自分が創ったんだから。主宰です。

小勝：そうではなくその前、「西部女性美術展」。

田部：「西部女性展」は出しました。それは朝日新聞が主宰をしていて、女性展というのが初めてだから出しましたよ。いきなり賞をもらって、ずっと賞をもらって。結局は……

小勝：最初の回から出されているんですよね。

田部：最初の回からだと思います。

小勝：57年が第1回。そこに《ヤマトタケルノミコト》（『田部光子 TABE MITSUKO Recent Works』掲載、

p.11、福岡市美術館寄託）を出されたのですか？（注：1957年第1回西部女性美術展に関する新聞記事等の資料は未発見）

田部：それが最後。

小勝：え？

田部：最後に出したんですよ。これが賞を取るといいねって、山内（重太郎）さんが行ってたけど、佳作賞に終わった。

小勝：だけれども、《魚族の怒り》（1959年、福岡市美術館蔵）で賞を取られたんじゃないですか。（注：第3回西部女性美術展、朝日銀賞一席、1959年。「第3回西日本洋画新人秀作展」でも金賞受賞、1960年）

田部：そうそう、朝日新聞社賞をとったの。それが後？

小勝：そのほうが後だと思います。

田部：もう後先がわからないのよね、あの頃の。58年に結婚したから、その時にその絵があったか描いたか、その程度の判断の仕方なんです、私。だから、いつも山口洋三さん（福岡市美術館学芸員）が「違う違う」というの。

小勝：「西部女性美術展」には、記録ですと4回（1960年）まで出していっしょにいますよね。

田部：そうですね。そのくらいしか無かったと思うんですよ。

小勝：この地元の展覧会としては。

田部：うん。岩田屋でやってたんですけど、結構命は短かったですよ。もう女性のためにそこまでする必要ない、と。女性が十分強くなったとかいって。それをね、由本（みどり、美術史家）さんが調べてくれていうからね、朝日の女性記者に調べてもらったんですけどね、全く残ってないんだって、記録が。

小勝：どういう人が出品していたかとかがわからないわけですね。

田部：北九州の本社で、吉原君ていうのが企画してて、私もよく遊びにいらっていて、呑みにいたりしてたんだから。その人の記録でわかるはずっていうんですけどね、全然残ってないって。だから諦めたんですよ。

北原：当時、それは新聞に載らなかったんですか。朝日新聞主催だったら朝日の地元版には載ってますよね。

田部：残ってますよ、批評とか。

小勝：もちろん新聞には記録としては残っています。ただどういう人が出品したのか、とかリストとかはないんですか？（注：第2回展の福岡県からの入選・入選者の一覧は掲載。朝日新聞福岡県版、1958年11月23日）

田部：そういうのが一切ないんだって。だから、由本さんもそこに注目して、小勝さんと違う視点でいこうと思って、女性展のその辺でいこうと思って、調べてっていうけどですね。全然残ってないから、しょうがないです。

小勝：でも珍しいですよ、そういう女性だけの美術展というのはね。この時期だと、本当に早いです。

田部：そうそう。その当時ね、すごい面白いことだから……

小勝：ただ、由本さんもインタビューで聞いていらしたと思いますが、東京では女流画家協会が戦後すぐに出来た時代だったので、女性の画家というのを持ち上げる気運というのが恐らくこちらの福岡でもあったのでしょいかね。

田部：あったんでしょね、その関係でね。それで「西日本新人洋画秀作展」（注：正確には「西日本洋画新人秀作展」）で、「西部女性展」の朝日銀賞の私が大賞（注：正確には金賞）をもらったから鼻高々ですよ、「西部女性展」は。他の並み居る県展とか市展の上位賞を集めて、なおかつ賞をやる。これもまた、私は運が良いというかね。地元の評論家の岸田勉は、九州派が大嫌いだったんです。その人がご病気で、たまたま嘉門（安雄）さんが1年だけ来たの。その時に私があたって、それで嘉門さんが「これだ」って言って大賞を下さったの。批評もちゃんと書いてくれて。どんだけ、私の運が良いか。

小勝：嘉門さんはその前に、「自由美術展」でも田部さんの作品を褒めているんですよ。（注：嘉門安雄「萎縮している線と形、自由美術展評」、産業経済新聞、1959年10月27日）

田部：そうらしいですね。私それね、嘉門さんが書いたってことを知らなかったの。

小勝：この時は、《繁殖する》（1959年）っていう作品でした。

田部：はい、あれを出しました。それね、落選してたんだって。それを（井上）長三郎さんがね、こんなもんを落選させたらいかん」とか言ってね、又持ってきて陳列させたんだって。という話を後から聞きましたよ。

小勝：この《繁殖する》（1959年）は今、福岡市美術館に所蔵されている、あれなんですよ。

田部：そう。返してっていつてるんだけど、そんなことできんって。

小勝：それともう一つお聞きしたいのは、先程の済美会時代には、身近な家庭内にあるような静物や風景もお描きになっていましたよね。

田部：シャルダンみたいなね。それと中州の風景。

小勝：そういったものをお描きになっていたのが、突然では無いのでしょうか、この記録だと突然、57年に《ヤマトタケルノミコト》を描かれて……

田部：大きいですよ。それがなんで突然か。これはね、私は自分が描いたのも忘れていたんですけど、私が嫁に行く時に母がね、私の間借りしていたところから持って帰ってくれていて、実家に。そしてきちっと座布団を自分で作って四隅に当ててね、紐で結んで押し入れの一番奥に入ってたんですよ。それが、母が亡くなったので家も売って、処分したらこれが出てきて。うわあ、これ懐かしいとか言って持って帰ってきたの。

小勝：ご実家でずっと保存していたださったんですか。

田部：そうなの。親は有り難いね。そうしたら、また（山口）洋三さんがひょこっと来て、私この奥のほうに置いていたんですよ。

小勝：はい、私も最初に（こちらに）伺った時に、ここで拝見致しました。

田部：そうしたら洋三さんが、「あれ何ね」っていうからね、「これはアスファルトの最後やろう」っていったの。「これ面白い」、とかいってね、早速持って行っちゃったよ、美術館に。

小勝：今は福岡市美術館に寄託されていますね。これもアスファルトを使っているんですか。

田部：これは唯一アスファルトをしっかり使っていますね。

小勝：アスファルトを使い始めたのはいつからでしょうか。

田部：ああ、だからね、もう最初からですよ。その《魚族》（1957年）には使ってないかもしれないけど、《魚族の怒り》（1958-59年）からは使っていますので。

中嶋：《魚族の怒り》よりも、《ヤマトタケルノミコト》のほうが早いですね。

田部：こっちのほうが、たくさん使ってるね。これもベースは全部アスファルトですよ。

小勝：ただ《ヤマトタケルノミコト》を出品されたという第1回西部女性美術展（1957年11月）の前に「グループQ18人展」が8月にあるんですが、そこには何を出したかというのは覚えていらっしゃいますか。

田部：これと同じ版画でしょう。こんなのがあったじゃないですか。

小勝：版画ですか、これですか（注：《魚族》、機関誌『九州派』2号、1957年12月に図版掲載）。

田部：うん、それを出した。

小勝：これは、記録だと、他のところに出しているように書いてあったんですが。

田部：機関誌に載ったんでしょう。

小勝：ええ、そうです。九州派の機関誌に載ったんですが、「第1回九州アンデパンダン展」の目録に（《魚族1》《魚族2》と）書いてあるんです。

田部：これ？ その辺記憶がないね。小さい絵ですよ、これくらいの。小さいからね。

小勝：それで、先程のお話に戻りますが、済美会時代のサークル活動として、静物や風景を描いていた田部さんが、急にこういう前衛的な抽象っぽいアスファルトを使う作品に転換したきっかけというのは、どうい

ところにあったのでしょうか。

田部：そうですね。絵とはどういうものかということで始めたんでしょからね、写生から。

小勝：基礎を一応なさったんでしょけれども。

田部：だけど、そういうものではどこか満足できないというところがあったんですよ。そして九州派のハチャメチャな……

小勝：この辺りに九州派との出会いがあったわけですね。

田部：そうそう。そしてアスファルト・ピッチによる制作、とにかく油絵を使うな、筆を使うな、カンバス使うなど制限をまずして、新しい絵画を目指すんだという宣言です。

小勝：それは「グループQ18人展」の時には、もうそういう……

田部：いえ、その時にはまだ曖昧だったと思うけれども、九州派という名称が出来てからは、ひたすら新しい、という……

小勝：田部さんが、九州派の人たちとつきあい始めたのがいつかというのがわからないのですが。

田部：57年。結婚前だったから。

小勝：57年は「グループQ展」が8月にあったんですが、その年からですか。

田部：それと、県庁の横にあったでしょう、あれには私は出していないんですよ。

小勝：県庁の横に展示した時ですか。(注:「ペルソナ」展、福岡県庁西側大通り壁面、1956年11月2日-4日)

田部：だから、あまり大作が出来ないというかね。

小勝：岩田屋争議が同じ57年の3月から5月なのですが、九州派とのお付き合いが始まったのはその前でしたか後でしたか。

田部：はあ、そうね。それね、前ですよ。

小勝：前でしょうね。

田部：だから私が第2(組合)に入ったら怒ったの、桜井(孝身)さんが。除名するぞ、って。

中嶋：桜井さんはその時に、西日本新聞の組合に入っていた……

田部：でも俣野さんなんてね、もの凄いリンチにあったらしいよ、言葉の。それは齋藤秀三郎さんがいった。もう、かわいそうで聞かれなかったぞ、って言ってましたからね。私にはそういうことは知らんけども、私は

自発的に「あらそうなの、じゃまた戻ろう」って戻ったりして。どうでもいいのよ、私にとっては（笑）。

中嶋：桜井さんとは、昨日伺ったように岩田屋のギャラリーで、個展か展覧会をやったわけですね。

田部：そうですね、その頃に一緒くたに来てますね。

中嶋：では岩田屋がそういう場所になっていた、ということですか。

田部：そうそう。

中嶋：一度お聞きしたかったのですが、九州派が「福岡」ではなくてあえて「九州」とされた理由や経緯はご存じでしょうか。

田部：いや、それは侯野さんがね、ほととぎす派とか自然派とかそういう「派」をつけないと有名になれない、と。だから何派にするかということから、じゃあ九州派がよかろう、と。グループQからの流れもあるし、九州派にしよう、と全員一致で。

小勝：グループQのQは九州の九なんですか。

田部：そう。

中嶋：ではこの「グループQ展」では、何を出されたのかは判然としないのでしょうか。

田部：あれと思う、あれ、版画。

小勝：これに似たサイズの……

中嶋：どんな作品が他にあったのかはご記憶にありますか。

田部：とにかくね、無茶苦茶ですよ。なんか御簾かなにか出していたりね。

中嶋：前衛生け花もあったとか。

田部：前衛にもなってないんじゃないかな。それこそおもちゃ箱でもないかな。

小勝：生け花のほうも出してたんですか。

田部：そう、生け花の先生も。

中嶋：徳田淳子さんという方ですね。

田部：あの人はね、1回くらいしか出してないですよ。大衆路線です。桜井さんも大衆路線。いつもそうやって、「質より量だ」とかいいたすのよ。それで、茂久馬さんが「量より質だ」ってやりだすの。そして、「公募展やらに出している奴は出て行け」となる。

中嶋：そのお2人の対立があったんですね。それではいわゆる抽象というか、アンフォルメル的という絵画と出会ったのも、九州派を通じてだったのですか。

田部：だから、アスファルトだからアンフォルメルなのよ。先に材料があるわけ。アスファルトをばーっと板に流してごらん、アンフォルメルでしょう、それ。それがフランスから入ってきたということ。

中嶋：そういう作品は当時美術雑誌などでご覧になったことはありましたか。

田部：美術雑誌を取るほどお金もなかったね。給料がとにかく6千円くらいですから。

小勝：昨日も言いましたように、同じ1957年の3月5日から10日に岩田屋ホールで、「世界・今日の美術」展というアンフォルメル展をやっているんですよ。

田部：記憶にない。

小勝：記憶にないですか。

中嶋：その次の年のお話ですが、「第2回九州派展」銀座画廊で。

田部：第2回。何年ですか、61年？

中嶋：1958年です。それは、1回目といえば1回目ですね。「Q展」の次に九州派グループとしてとして行われたものです。

田部：ああ、そういう意味ね。60年が最初でしょう？ 61年にあれを出したんですから私、《人工胎盤》(1961年)。

小勝：そうですね、61年が東京でやった最後ですよ。

田部：最初。最後じゃないよ。

小勝：いやいや、58年に銀座画廊でやっているはずですから。

田部：美目が後ですよ。

小勝：美目は後です。

田部：だから最後じゃ無いじゃないですか。

小勝：東京ではなく、銀座でやった最後ですね。

田部：ああ、銀座で、ね。美目は新宿かなんか、どこでしたかね。

小勝：ああ、そうですね。銀座画廊でやった最後ですね。

田部：銀座画廊でやったのは、2回しかしてないです。（注：記録によれば、1958年、1959年、1961年の3回開催）

小勝：そうですか。

中嶋：その1回目の時に東京に行かれたわけですね。

田部：行きましたよ。それは《繁殖》じゃなくて、《魚族》（1957年）っていうだけだから50号を2枚位を出したんですよ。（注：出品目録によれば、《魚の笑いA,B》を出品したのは第3回九州派グループ展、銀座画廊、1959年）

中嶋：その時は、東京へ行くのは初めてだったのですか。

田部：初めてかもしれないね。アンデパンダンはその後ですからね。初めてですよ、ここに20万くらいの。あ、それは61年だ。

小勝：そうです。

田部：それが初めてだと思ってたけど。61年に私は正式に、（九州派の）会計係になりました。会計係は女が良いとかいって、男はすぐ使い込むから。それで妊娠5ヶ月の腹帯の上に、そのお金を巻いていったんですよ。なにしろ（東京まで）24時間かかるからですね。それでスリがものすごく多かったの。だからこんなのをこっかけてたらね、一発で無いですよ、お金。だから、ここにはめてる以上はね、無くならないから。

中嶋：東京に行かれた時の印象をお伺いしたかったのですが。

田部：銀座画廊の下で浮世絵を売ってたよ、ばんばん。外人が群がって買ってたね。それが印象に残ってます。あと、丸山明宏が、銀座のなんとかってお店（注：銀巴里）で歌ってたから、それを聞きに行ったりして。六本木がすごいらしいよっていうので行ったら、何にもないところで、間違ったかな、なんていいながら帰ったりして。

中嶋：では、結構いろいろなところを見て回られたんですね。記録によると58年の銀座画廊の展覧会の時に、針生（一郎）さんと池田龍雄さんがいらっしゃっているということになっていますが。

田部：58年なの？ それも来ましたよ、写真もありますし。それは載ってるよ、九州派の写真。九州派。載ってるはずだね…… ほらほら、これ。これ何年って書いてありますか。

中嶋：これは61年ですね。

田部：そうですよ、だから58年なんか無いって。60年と61年です。

中嶋：これ、中原佑介さんが居ますね。

田部：58年に東京ではしてないよ。

小勝：ですが、ちゃんとここに書かれちゃっていますし。(注:「九州派展」カタログ、p.112。「九州派グループ展」目録がある。銀座画廊、8月2日-7日、年記なし。針生一郎による九州派展の展評で、石橋光子の作品について触れている。「時評的評論」『みづゑ』No.660、1958年9月号、p.75)

田部：なんか揺れたような写真があるでしょう。何人かで南画廊で撮ったの、あれは何年だろう。

小勝：田部さんは《繁殖1～4》を出した、という記録になっていますが。

田部：全然記憶にない。

小勝：菊畑さんも出してますし、皆さんいっぱい出していっちゃいます。桜井さんも。

田部：南画廊に行った写真があるよ、ちょっとピンぼけの。わざと動くのよ。とにかく何年かということ(記録に)書かないのよね。あれが欠点なの。11月2日～4日とか書くでしょう。ここに必ず年号を入れんといかんね。後で気がつくのよ、みんな。入れてたら絶対に人がなんといおうとね。

小勝：この『二千年の林檎』(西日本新聞社、2001年、p.188)の田部さんの座談会のご発言で、「お兄さんの石橋和美さんが制作者懇談会に所属していたので、その関係で針生一郎と池田龍雄が九州派展を訪れる」とあるんです。これが58年のことだと思ったんですが、ここには書いてありませんけれど。

田部：これが58年。それならそうかもしれない。

中嶋：56年にはすでに石橋和美さんと針生さんが知り合っていちゃいますので、可能性としてはありますよね。

田部：結構長いんですよ、付き合いは。無いね、あの写真。どっかで見たんだけど。60年からはちゃんと記録があるんだな。これを出したのはいつかな。

中嶋：これは60年ですね。これは『芸術新潮』に掲載されたものです。

田部：その辺からは記憶にあるんですけど。58年にこれが出たんなら……確かにこれは4枚作ったからね。

中嶋：《繁殖》(1958年)ですね。

小勝：4枚作って、2枚なくなっちゃったんですか。

田部：そうですね。東京に置いたまんま、どっかに捨ててきたの。

小勝：当時は東京には送ったんですか、作品は。

田部：井尻にいましたから雑餉隈(ざっしょのくま)までリアカーで持って行って。

小勝：汽車の貨物便ですか。

田部：汽車貨物。それでしょっちゅう送ってました。それで、笑うんだけど。自分が若ければ全オフィスの人が加勢してくれるの。年取ったら知らん顔。相手の対応で年齢がわかるね、っていつもいうんだけどね。若かったらみんなが親切でしょう、あなたでも。年取ったらだれも親切にしてくれないのよ。

小勝：貨物を送った時は、親切だったんですか。

田部：もう全員でね、この荷造りじゃいかん、とかいって手伝ってくれるんですよ。だけど、そのうちに宅急便とかが出たからね。面白いよね、人間て。

小勝：この時期、いろいろと東京の展覧会に出品されるようになっていきますね。昨日も伺いましたが、「自由美術展」にも57年から59年まで出していらっしゃいます。それと九州派と平行していらっしゃるんですよ。その中で、公募展を選ぶか九州派を選ぶかで、九州派を選ばれたわけですね。

田部：激烈な戦いがあって、とうとう一番先にね、寺田健一郎というのが二科に出してたからね、それで怒って障子をピシャーンとしまして出て行ったの。「やめる」といって。私と大黒（愛子）さんが追いかけていって、説得したけれど全然ダメでしたからね。あの人は二科の会員になるっていったから。でも結局なれなかったのよ。その次は尾花（成春）さんが標的にされて、尾花さんは九州派をやめたの。座布団投げつけて出て行ったからね。

小勝：それと、日本美術会のアンデパンダン展に、59年に1回だけ出品された（注：第12回日本アンデパンダン展、《ジャン・ジュネへ》《魚族の怒り》）。こちらには行ってはいらっしゃらないんですね。

田部：行ってないですね。いや、行ったかしらんね。もう1人の友達と行って、うちの兄のところに泊まった記憶がある。行ったかもしれません。

小勝：1回でやめた理由というのは。

田部：面白くないもん、みんな社会主義リアリズムで。山下菊二さんも、みんな面白いっていうけれど、あのより私は中村宏のほうが面白い。

小勝：61年からですからね、田部さんが「読売アンデパンダン」に出品されるのは。九州派の方々と一緒に出品されました。

田部：そうですね。

小勝：では、九州派のお話の続きにまいります。61年の「九州派展」というのは、皆さんオブジェを出品した。それまで、アスファルトを流すとはいえ一応、絵画だったわけですよ。それが61年からオブジェを出品するというのを皆さんがテーマにしていらしたと思うんですが、その辺はどういう理由があったのでしょうか。

田部：私は、自分が妊娠したから、女性の解放。必然性があるんですけど。石橋泰幸さんも、それこそ《奴隷系図》（1962年）みたいなものを出してましたよね。

中嶋：絵画から離脱したいという意識ですか。

田部：それはありますよね。絵画ではどうしても限界があるからね。こういう活動としては。

中嶋：どういう限界でしょうか。

田部：やはり、平面ですし。貼り付けたりはしますよ、縄とか。だからジャスティンもこれ選んでるんだと思うんだけどね。ローブを貼ったのをね。

小勝：縄を貼り付けている作品ですよ。それは61年の「読売アンデパンダン」です。(注：第13回読売アンデパンダン展、《同族同志》、「九州派展」カタログ、p.81に図版掲載)

田部：それを「後家の頑張り」って針生一郎がけなしたっていうわけよ。だけど後で、「針生一郎っていうのは、純情な主婦と後家の頑張りとに分けとったんだ」とかどっかで……

小勝：女性を褒める場合、その2つだっていっているんですよ、針生一郎が。

田部：あら、そうなんですか。褒める場合なの。けなしたって言ってね、桜井さんは長頼子に首っただけでしたからね。長頼子だけなの、私なんてもう目障りなんですよ。「あんた、後家の頑張りってけなしちよったバイ」ってなったのよ。そしたら茂久馬さんが「そんなことはない、あの絵は良かったんだ」ってバーンと弁護してくれたの。だから私はね、菊畑さん好きよ。

小勝：この展覧会に、江原順が「オモチャ箱をひっくり返したような」という批評がある後に、「九州派展」のカタログは、それだけで引用が終わっていたんですが、田部さんの作品について「グロテスクな生理的形態のオブジェ、……面白い可能性が感じられる。……ただ、もう少し自覚的なものにする方向が出てこなければ話にならない」とありました。(注：江原順「画廊から《9月初旬—10月初旬》」、『みづゑ』1961年11月、p.76)

田部：そう、良いとこついてるもん。私はいつでもぱーっとやるけど、そのことについての自覚がないって、どこかに書いてますよ自分で。自覚して出来ないというかね。

小勝：ただ、《人工胎盤》(1961年)を作られたきっかけとか、こめられたお気持ちとかをもう少し詳しくお話しいただけますでしょうか。

田部：人工胎盤があったら、自分がこんなに大きなお腹をかかえて苦しんでもよかろう、とか、そういう短絡的な考え方をする馬鹿ですよ、私は。

中嶋：苦しいことを表現なさったということですか。

田部：苦しくもまだなっていないと思うよ、妊娠数ヶ月位だから。でもやっぱり、悪阻は苦しいから。安定期に入ったらなんてことはないんですよ。だから人工胎盤があったら楽だなとか思った、軽薄な。

小勝：そう軽くおっしゃいますが、この残された当時の写真を見ますと、ものすごくグロテスクですし痛そうですし。

田部：そうなんです。ぞっとする。なぜかといったら、米倉徳というのがね京屋マネキンにいたの。だからマネキンが安易に手に入るの。こんなふうに切つてというと、なんでもしてくれるんですよ。それがなかったら、出来てないね。

小勝：田部さん以外にマネキンを使われた方はこの時にいたんですか。

田部：いや、マネキンは意外と少ないんですよ。私は「英雄たちの大集会」でも使っているんですよ。なんかやっぱり女性の体という興味があったと思うんです。マネキンというのはほとんど女ですからね。今は男のマネキンもあるけれど。

中嶋：デパートにもマネキンはありましたか。

田部：ありますよ。どんどん進化はしているけど、一応どこの売り場にでも。繊維課はトルソーだけでいいし、洋服課には全身があるし。(注：田部氏は1958年1月まで岩田屋というデパートに勤務)

小勝：子宮ではなく、胎盤というものに敢えてしたのは、どういう意味があったのでしょうか。

田部：やはり子宮じゃないんですよ、胎盤だから。妊娠するというのは、胎盤がないとできないんですよ。子宮に胎盤がくっつくんですよ。

小勝：ええ、母胎と子宮の中の胎児の間をつないで栄養を与えるわけですよ。

田部：だから、胎盤とはどんなものかということも知らないのに、真空管は男性性器に見立てて、いっぱい電気のコードは血管ですよ、アスファルト・ピッチにパテを……

小勝：アスファルト・ピッチは、振りかけたんですか。

田部：そう、下地にすると何でもつくんですよ。パテでも何でも。マネキンには何にもくっつかないんですよ。

小勝：最初にアスファルト・ピッチをかけて、接着剤として使ったわけですか。

田部：あれは優秀な接着剤なの、熱い時は。何でもくっつけちゃうから。

小勝：それはもう絵画で使っていたら、オブジェでも、ということですね。

田部：火傷はしますよ、どっかにケロイドの痕があるもんね。

中嶋：マネキンを逆さまにした理由はありますか。

田部：それは安定感があるから。ここが木なのよ。これくらいの厚い木で出来てるの。

中嶋：台座ですか。

田部：いや、マネキンがよ。ここだけね。だから、ここに差し込んで全体を作るんでしょう。ここにこの木があるから安定するんですよ。これをひっくり返したってしょうがないじゃないですか、全然。こっちが上になったら意味ないよ。

小勝：安定のためだけですか。

田部：いや、そんなあれじゃないんだろうけど。

中嶋：見るからにすごく痛々しいような感じもしますし……

田部：熊本の再制作（注：後述）を見た一般の人からね、この人の作品は「痛い痛いっていつてる」とか「この人は3体作って、3人子どもを産んだのかしら」とかね。いろんなことが書かれていて、面白かった。

中嶋：九州派の他の作家の方は、この作品を観てどのような感想をおっしゃっていましたか。

田部：全然評価しないのよ、私なんか。

中嶋：どんな感想を。

田部：感想もなんも。

小勝：感想も何もないんですか。つまりお互いの批評会みたいなものはしないんですか。

田部：ありましたけど、とりあえずは。

小勝：あまり実のある批評はありませんでしたか。

田部：そうねえ。その前にね、みんなの家を廻るのよ。桜井さんと米倉徳とか、何人連れかが来るのよ。それで私の作ってるこれを見てね、「あんたこんな作品づくりよったら、変な子ができるばい」とかいわれました。覚えてるよ。

北原：そういうのを創るなってことですか。

田部：そんなのを創ったら、変な子が産まれるっていうわけよ。でもね、それが若さだっと思うのよ、私は。今ならすぐに止めますよ。「あら、縁起が悪いのね、やめとこう」って。だけど、若さは強いんですよ。そういわれようがどうしても、へっちゃらなの。さっさと作り続けて、平気で出品してちゃんとした子どもが産まれたじゃないですか。そこが若さの強さですね。20代の強さ。だから若い時にしか思い切ったことは出来ないですもん。

中嶋：この作品を創っている時に、どういう感じがしたかというのは覚えていらっしゃいますか。

田部：面白かったですよ。「おー、なかなか面白い」とか言って、「これはきっと有名になるぞ」と思っていました。それは付け足しだけどもね（笑）。

中嶋：ご自身でも、特別な作品だという大作の意識があたりだったんですね。

田部：ありましたね。

中嶋：この横の輪っかはなんですか。(注：《人工胎盤》の横に金属製とみられる輪がついている)

田部：それは足よ、足。そこから先が足なの。ちよん切ってるの。

小勝：こっちがウエストで、こっちが足。

中嶋：この輪っかです。

田部：ああ、それはね。何個かつけてるんじゃない、あっちこっちに。これは吊すときのためかね。

中嶋：吊るそうと思ったんですか。

田部：何だかわからないよ。その辺にあるもの手当たり次第にくっつけていくのよ、何でも。

中嶋：マネキンはもう一つの「英雄たちの大集会」(1962年)に出されたものもありますね。(注：マネキンに釘を打つというハプニング)

田部：「英雄たちの大集会」もね、頭に釘を打ち込むとかいって、勇み足でしたけど、このマネキンの堅さ。

小勝：頭に打ち込むつもりだったんですか。

田部：うん、打ち込むことでね。だから案外、オノ・ヨーコより先だったと思うの、釘を打ち込むという行為としては。

小勝：それを参加者にやらせるつもりだったんですか。

田部：いや、自分でどんどん一晩中するつもりだったんだけど、絶対入らないのよ、ドリルでも持ってこないことには。それで変更して、風倉(匠)さんがちり紙かなにかをさすりながら、延々とちり紙がどんどん出て行くような、変わったパフォーマンスにしちゃったのよ。私は、壁から足が出てきて、ストッキングを履かしているということは、作ってましたから。パフォーマンスは、もう。

小勝：壁から横に出てきているんですか。今まで下から生えてるのかとイメージしていましたが、横から出てきているんですか。

田部：そうそう。どこまで覚えてるかっていうとあんまり覚えてないんだけど、何面作ったかも覚えてないんだけど。風倉さんのほうが覚えてたね。風倉さんが、トイレトペーパーを使って、あっちこっち参入してパフォーマンスに参加するわけよ。

中嶋：でも、田部さんが釘を打ち込むことと、風倉さんがティッシュペーパーでさするというのは、だいぶ意味が変わってしまいますよね。

田部：違いますよね。全然違うんだけど……

小勝：釘を打ち込むというのは、どういう意味を込めようとされたんですか。

田部：この《人工胎盤》の釘から来てるんでしょうね。

小勝：なるほどね。やはり痛みとか女性の美しい体に対して……

田部：そうですね。

小勝：あ、あんまり私が言っちゃいけないんですけど。

田部：いいですよ、言って（笑）。

中嶋：こういうものを使うのは、諸刃の剣というか、自分の性についてどう考えているかということ误解されることもあるんじゃないかと思うんですが。

田部：どういう風に誤解されるんですか。

中嶋：たとえばマネキンの足にストッキングを履かせるということが……

田部：ああ、媚びてるって思われるってということ。

中嶋：媚びてるかどうかはわからないんですが、現にヨシダ・ヨシエさんは割と明らかに性的に楽しんだという感じがするんですね。

小勝：「色情狂的、ニンフォマニア的聖堂」とっています。

田部：ふーん、ほんと？

中嶋：そういうことに関して、どういう風に感じていらしたかというのもお伺いしたいんですが。

田部：そういうところの女性意識っていうのは、私にはあんまりないよね。

中嶋：でもストッキングというのは、すごく特別な……

田部：あの頃はすぐに伝線して破れるんですよ。1本いくらで修理に出してました。

中嶋：すごく大切なものですよ。

田部：そう、大切なものですよ。今みたいに3枚くらいというようなものはないのよ。すごく大事にしてたね。

小勝：ではそういう大事なものをたくさん履かせたんですね。そうすると田部さんとしては、女性の足の美し

さを……

田部：私足が綺麗でね、自慢じゃないけれど。「あんた足のモデルになり」、とかいわれて足だけ出てるモデルとかあったんですよ、繊維課といって下着とかの課があるんですけど、そこで出らんね、といわれたりしてね。足の格好だけは自信があったの。今でも鍼灸師が、あんたの足まっすぐやね、っていうからね。

小勝：やはり、美しいものを並べるといって感じでもあったわけですか。

田部：それもありますね。やはり芸術は美しくなければいけないというのが、どこかにありますよ。だから、私のトークショーに来ていた大阪の人が変なのを送ってきたけれど、やっぱりああいうグロテスクなものはあんまり受け入れないね。グロテスクはグロテスクで、なにか美しくないといかん。

小勝：ちょっと胎盤の話に戻ってもよろしいですか。《人工胎盤》(1961年)の再制作を熊本の美術館の依頼で2004年になさいましたよね。

田部：絶対に再制作はしないと決めとったんだけどね。あの方(南郷宏氏、当時熊本市現代美術館館長)がね、1年以上経って「出来た？」っていうからね、え、本気なんだと思って。いくらくれますか、とかいって。そしたらうん百万円というから、それじゃしますって。お金が欲しいから(笑)。

小勝：再制作にあたって、今度は最初の時とは違いましたか。

田部：うん、ちょっとあまりにもグロテスクだから、そのものを制作することは不可能ですね。パテも手に入らないし、アスファルトももう今はコールタールになっちゃってね。固まってないから、コールタールは扱い切らんですよ。あれも熱したら固まるとかって、誰かがいったけどね。

小勝：再制作では、綿を使っていらっしゃるんですよね。

田部：そうですね。最初は脱脂綿かなんかだったんだけど。今は人工綿がいっぱいでてるから。それとか、毛細血管もアメリカから赤くて細い針金を取り寄せてもらって、お店で。子宮の中に毛細血管を、べーっと入れてね。

中嶋：1回目に作られた時と2回目に作られた時と……

田部：だいぶ違いますね。1回目は子どももちゃんと産んで、子どもの可愛さもわかったし。ちょっとばかり可愛いのにしよう、という意識は働いています。あんまりグロテスクだとね、かわいそうだし。こんなところに入ってる子どももかわいそうだしね。産まれてきたらわかりますよね。とにかく細い細い指にちゃんと爪がついてるのよ。あれは感動でした。みんなお産の後はグーグー寝るっていうけどね、私は寝れないの。24時間眺めてた。これは最高の芸術作品だ、と思ってね。こんな完璧な芸術作品はない。これをうちの息子にいうとね、「これは最高のなんとかだというのは、職業によって表現が違う」とかいったよ。

小勝：なるほどね。自分が作るものの中で一番いいもの。アーティストなら芸術作品。

田部：そうそう。芝居かな、何の例を引いたかは忘れちゃったけど、誰それはこういったというようなことを、よく知ってるの。

中嶋：最初の作品を作られた時におっしゃっていた、妊娠から解放されなければ女性の解放はないという考えは、今は持っていらっしゃらないわけですね。

田部：持ってないですね。ただね、それがおかしいのよ。今から10年以上前になるけれど、藤原書店の勉強会がよくあったんです。ときどき河野さんがいくからついて行っとったんだけど。東京医科歯科大学の教授がきてね、話したの。人工胎盤はもう実用の段階になっていると。人工胎盤というそのことばに反応したのね、私。「実は61年に私、《人工胎盤》(1961年)という作品を創ったんですけど」って。言ったらなんかもうKYなんですよ、言ったこと自体は。もう実用の段階で、あとは倫理の問題だけだっておっしゃってました。だから私は再制作にあたってね、東京医科歯科大に見に行こうと思ったんですよ。だけど、絶対見せてくれないしね。企業秘密というか。ちょっとあたってもらったけれども、全然見せてくれないし、無理だと思ったんですよ。もしそれが巨大なものだったら、どうしますか。こんな巨大なものだったら、出来ないし。だからもう、前のものと同じように、簡単におこうと思って。今はもうそういう段階ですよ、生殖テクノロジーというのは、画期的に進んでいるんです。あとは倫理の問題で普及しないだけです。だから子どもが出来ない人は、試験管ベビーとして一応着床させてから子宮に戻すんですよ。知り合いの夫婦がそれで成功して子どもを産みました。1人産んだら、すぐにもう1人出来るの。2人も産んだの。そうとうお金はかかったらしいんですけどね。

中嶋：そういう生物学的な生殖テクノロジーというのはどんどん変わっているわけですね。

田部：どんどん発展してるんです。だからそのうちに男も子どもを産めるようになる。

小勝：それこそ、クローンとかね。

田部：そうそう。だから女も早く産んどかんとね、産めなくなるわよ。私が寝たきり老人になったら、ここに着床させてっていうのよ。ちゃんと産んじゃるけん、って。いくらかは社会のお役に立たなきゃいかんもんねっていうと、みんなは「相手にすんな、ばかなことをいう」て(笑)。

小勝：《人工胎盤》(1961年)については、一応お終いと致しまして。同じ61年の九州派展に《プラカード》(1961年)を5点出していらっやいますね。(注：襖に、アフリカ大陸をかたどった図を表し、人工の毛や雑誌からの切り抜きなどをコラージュをした作品)

田部：あれは一緒だったんじゃないですか、セットで。

小勝：セットでしたか。

田部：セットだった気がするけど、違うかね。

小勝：(《人工胎盤》と) 同じ時に出していらっやるんです。

田部：あっちとこっちに並べたんじゃないかな。

小勝：《プラカード》はどういう意識で創られたんですか。

田部：あれは、とにかくいつも労組のプラカードを見る度に、つまらんねと思ってたのよ、通り一遍でね。

中嶋：「左翼のプラカードは右翼のそれに似ている」と書いていらっやいますね。

田部：そうそう。「右翼のそれ」よ、ことばがまず。右翼がまだ今でもやってるじゃないですか、日教組がどうのこうのと。

小勝：プラカードをアートとして作る、ということですか。とくにアフリカのコンゴの独立……

田部：そう。アフリカのコンゴの独立があつてね、私たちは民族独立ということで大変に喜んだんですよ。そうしたらあつという間に、今度は民族同士の殺し合いになったじゃないですか。あれを何とか次の世代の人に、あなたたちに考えて欲しいの。そのことを。なぜ民族独立が幸せに繋がらないのかということをね。もう私の思想では、考えられないよ、ああいう風になっていくことは。コンゴはせっかく独立したのに、一番不幸になってるじゃない。ソマリアもそうだし。そういう風な落差といいますか、非常に文明国家として発達すれば、そういうことを当たり前として受け入れられるけれども、まだ女性のクリトリスを切り取るじゃないですか。朝吹登美子さんのエッセイに書いてあるじゃないですか。ああいうことが未だ行われているということ、グローバルな視点で許しているということ、あなたがたに考えて欲しい。何とかしないと永久に女性の悲劇は収まらないよ。インドでも、嫁に来て持参金のスクーターがなかったってだけで、焼き殺したりするでしょう。調理中に火が付いたとか、嘘をついてるの。それを許している社会、世界。

小勝：この《プラカード》はアフリカをモチーフとしたものが3点あつて、キスマークは、祝福をしたんですよ。

田部：私の唇につけて、ばんばん押していったの。

小勝：可愛いというか、それに加えてエロティックなところもありますよね。この毛はマネキンの毛をつけていらっやるんですか。

田部：そう。そういうものは何でも手に入るからね、手当たり次第に。

小勝：このコラージュしている写真は……

田部：それは有名なミュージシャンだったりするらしいですよ。一人一人解説した人がいたの。これはジャズの誰々、これは誰って。

小勝：これは田部さんが好きなものを……

田部：無意識に。

小勝：無意識に選んでますか。

田部：それこそ、アサヒグラフかなんかから破って貼ったんじゃないですかね。

小勝：このマネキンの髪をつけたのは、どういう意味なんですか。

田部：やっぱり、エロティシズムかな。エロティシズムというのは、作品にとって大事だと思うんですよ。それが無いような作品はつまらないよ。やはり、人間の本質というのはエロティシズムから来てますから、どっちみち。

小勝：この《繁殖する》もね、私これを見て、卵が増殖している、と感じたんです。

田部：そう、卵です。魚の卵です。

小勝：これが箒の柄で作られたというのを伺いました、面白いですね。

田部：竹がないから箒よ。

中嶋：それにアスファルトをかけて。

田部：そうそう。あれはつけたらどこでもひっつきますからね。

小勝：この《プラカード》の方は、もう一つがアフリカの真ん中に……

田部：ここに女性の性器をつけてたの。

小勝：性器の写真ですか。

田部：そう、写真。うちの旦那は映画関係だからいくらでも手に入るの。ちょっと持ってきて、っていえば、何枚でも持ってきてくれるのよ。

小勝：その写真の上に、このマネキンの髪の毛を。

田部：そう絶対にばれないと思ってたのよ。

中嶋：そしたら『土曜漫画』で言及されているんですよ。

田部：ばれちゃったの。それで慌てて剥いだのよ。やはり日和見主義者よ、私は。覚悟がないのよ、覚悟が。ちょっと面白がってするだけで、これだってすぐに剥いじゃうじゃないですか。逮捕されるのは嫌だもんね。

小勝：アフリカのプラカードが3つで、あとの2つはアメリカの国旗ですか。

田部：そうですね。やはり、アメリカから支配されているという風な、ね。これは河原温のまねやないの。

小勝：あと鉄条網がありますよね。

田部：やっぱり基地問題。砂川の基地とか、あとは成田。成田の闘争。私は加勢には行かないけどね、そういうの嫌いだから。心の中では応援してます。(赤瀬川) 原平やはら、砂川基地にも行ってるもんね。風倉さんも多分行ってるんですよ。原平さんが行こうっていったらどこにでも行くんですよ。

中嶋：この色彩は樹脂ですか。非常にポップな感じもしますよね。

田部：それね。そうそう、なんでもポップよ、私は。一番ポップな果物は林檎だから、林檎にしたの。ポップアートが大好きなの。

中嶋：ですが、この頃はまだポップアートというものは、それほど日本では知られていなかったのではないかと思いますのですが。

田部：63年だからね。この直後よね、ポップアートが入ってくるのは。だから63年は林檎をテーマにしますもんね。

小勝：そうですね。

田部：でね、こんなことばかりしてても飯食っていけん、と思ったのよ、私。だから売れる絵も描かんといかん、綺麗な絵を描こうと思ったのがこの63年ですね。こうした作品が確かに今でも通用するんですよ。

中嶋：《プラカード》も色など綺麗です。

田部：そう、綺麗だからお金にせんといかん。

小勝：これ、襖にやってらっしゃるのが面白いですよね。

田部：そう、襖屋がうちの近くにあったの。どんなにでもしてくれる。真四角にしてっていえば真四角にも。(この作品は)真四角じゃないけどね。

小勝：では既成の襖ではないんですか。

田部：注文です。

中嶋：いろいろな独自の試みがあったんですね。

田部：そう、画材というか、それを選ぶのは大変よ。今度は何にしようか。私の兄がいうの、「お前まだあるのか」って。アイデアがあるのかって、いつも笑ってたけれどね。

小勝：そのアイデアといえば、次に行ってもいいですか。63年の最後の「読売アンデパンダン展」に、《裏と表》(1963年)を出品されましたね。(注:ファスナーが多数取り付けられたボディ・スーツ状の着衣の作品)

田部：これ出したんですね。これはだいぶ使いましたよ。シティ銀行の前での、これを着たダンサーが踊ってね、朝日(新聞)に載ったりしたんです。その記事がどこかにあるんだけどね。どこにいったかわかんない。

小勝：はい、あります。いただいたものを持ってきました。まず、《裏と表》というのはどういう意味なのですか。

田部：どういう意味ですかね。そんな素敵な名前をつけたなんて全然覚えてない。

小勝：覚えていないですか。

田部：やっぱりサルトルからきてるんじゃない、多分。

小勝：具体的には、サルトルからどういう……

田部：なんでもサルトルですもん。私は育児もサルトルでしたから。同じ知能指数ならね、想像力が優れている人のほうがはるかに学力が伸びるって書いてあるの。だから字なんて小学校いくまで知らなかったの、うちの子は。一にも二にも想像力。どうやってしたかは忘れたけど。具体的に筆記しておけば良かった。だから想像力だけは、ばんばんと。このダンサーは優秀だったけれど、なかなか生活苦にあえいでね。

中嶋：マユミ・ウィスニュースキーさんですね。

田部：そう、生活苦なのよ、子どもが3人も4人もいるかなんかで。だから芸術活動ができないのね。若い人にさせようと思って、若い人は金稼ぎで大変でしょう。就職もないし。うちの「ノンセクション」だって、定職に就くために今は事務局から外してるんですよ。そうしないと中途半端になるからね。西短の教授を目指して。

小勝：このオリジナルの発表時に戻りますと、この《裏と表》というのは、タイトなので、当然人間の皮膚と内側、女性の体の皮膚と内側とか。

田部：そうそう、そういう風につけたら成立するのよ、思想的に。

小勝：いやいや、田部さんのことばで言うだけじゃないと。

田部：だから小勝さん書いてよ。それを英訳して、今度ああいうカタログをもう一度出すから、それに載せて。私はこんなに考え深いんだ、と（笑）もう、頼む以外ないよ。

小勝：それと、ファスナーをいっぱいつけるというアイデアと……

田部：これに何を入れようかと思ったんだよね。コンドームを入れて、ずっと繋いでしようと思ったけれども、また旦那が怒ると思ってね、ちょっとやめた。今でもね、何を入れていいかわからないの、このファスナー。（注：上記着衣をダンサーに着てもらい、コンドームをポケットから取り出すパフォーマンス、2011年1月、福岡3号倉庫、福岡）

小勝：そうですか。でも逆に何でも入りますよね。何を入れる可能性もあるという。

田部：そう。だからこれ、今度荒尾日南子に着せて、私の個展でやらせようかと思って。ね、彼女なら出来るよ。国際的なパフォーマンスに出てるもの。ことばがなくで通用する演劇、フィラデルフィアの。

小勝：この間、通訳でいらした方ですね。

田部：そうそう。あの人にしてもらおうと思うんだけど。再来年かな。

小勝：面白いですね。それから、田部さんが『二千年の林檎』（西日本新聞社、2001年、p.210）での対談で、小杉武久さんのチェンバー・ミュージックに影響されてこういうファスナー付きの作品を作ったんだっておっしゃっているんですが……

田部：ほんとね。私、健忘症ですよ。

小勝：そうおっしゃっているんですけども、でも違うと思うんですよ。調べてみますと、小杉武久さんが「読売アンデパンダン」に出したのが第15回（1963年）で、田部さんこの《裏と表》が出たのと同じ年なんですね。だから、それに影響されるということはないと思うんですけど。

田部：なるほどね。もうなんか刑事さんみたいね。

小勝：やはり、裏付け調査をしないと（笑）。

田部：なるほど。裏付けがいるんだってね、新聞記者も。

小勝：それと、小杉さんのチェンバー・ミュージック……

田部：チェンバー・ミュージックなんて書いてあったの。どういう意味ですか、チェンバーって。

中嶋：部屋という意味ですけど。

小勝：ですから、袋の中が部屋であって、袋の中に入って自分の着ているものを次々と出して行って、最後に裸になって……

田部：ああ、それはオノ・ヨーコがしたのよね。切っていくのとか。

中嶋：オノ・ヨーコの《カット・ピース》ですか。

小勝：オノ・ヨーコも、袋の中に入るのもしたんです。（注：《バッグ・ピース》1964年、「前衛の女性 1950-1975の女性」展図録、写真掲載、cat.no.204）

田部：ああ、そうなの。風倉さんもね。「英雄たちの大集会」の時に、素っ裸で天井の梁を走っているうちにね、ようやくふくらみかけた風船にぼたんと落ちたの。怪我はせんですんだんだけど。それがヒントだったのよ、風船の中に入るという。風倉さんはちゃんと、死ぬ前にそのことをいってました。そのことがあって、入ることをしたんですよ。

小勝：そして小杉さんのその作品については、赤瀬川原平さんも、「読売アンデパンダン展」を振り返った著書の中に書いているんです、どういことをやったかというのは。（赤瀬川原平『反芸術アンパン』、1994年、pp.194-197）

田部：これはでも、「シーツ2枚を縫い合わせていろんなところにジッパーをつけた」って書いてあるのね。私のあれとはちょっと違うね。

小勝：違いますよね。そのチェンバー・ミュージックで使ったシート2枚の袋を、今現在は久保田成子さんが小杉さんから譲り受けて、自分の作品の《ビデオ・ポエム》(1968-69年) っていうのにしているんです(「前衛の女性 1950-1975の女性」展出品、cat.no.211)。では、そのチェンバー・ミュージックに影響を受けたかというのは嘘、ということですか(笑)。

田部：嘘だね。いや、そんなに格好いいことはいってないと思う。

小勝：嘘というか、座談会で話の流れで(リップ・サービスとして) ちょっと出てきただけなんですわね。

田部：そうそう。しかしこの、芦屋でやった小杉さんのバイオリンだけは素晴らしかったね。こんなバイオリンを聞いたのは初めてだと思って、これは一生バイオリンを聞かなくてもいいやと思ったの、私。即興なんですけどね、もう凄いですよ。今度いつか聞きたいね。

小勝：《裏と表》(1963年) は最初、第15回最後の「読売アンデパンダン展」に出した時は、ブラインドに吊したという話を前に伺ったんですが。

田部：そうですね、ブラインドに吊したかもしれないね。

田部：今日は九州派までで終わりですかね。

中嶋：いえ、その先まで伺いたいです。

田部：九州派っていうけどですよ、今はネオダダみたいに一緒に集まるわけでもないしね、なんてことないんですよ。たいしたことないの。

小勝：すみません、今途中になってしまった話で、《裏と表》をその後何回やったかということを確認したいんですけども。この間伺った時には、1968年のRKB毎日放送で、「九州派再発見、九州の前衛美術」というのを放映した時にも使っていたらっしゃったということでしたわね。

田部：そうね。ヴィーナス像をがーんと金槌で割ってね。

小勝：それは、田部さんが割ったんですか。

田部：はい、谷口路子っていうモデルを使ってね。

小勝：谷口路子さんがこのタイトを着て、ヴィーナスを割ったんですか。

田部：ヴィーナス像を創ったのは私です。あの人は髪が長かったから髪を梳いて、私がぐるぐると紐で巻いて、という。ほんのつまらないものよ。

小勝：その全体の演出というのは、田部さんがお考えになったんですが。

田部：それは私。

小勝：では、全体としてどういうことを表現しようと思われたんですか。

田部：女性の決まり切った退屈な日常性、それを表現するという。

小勝：それを破壊する、ということですか。

田部：う～ん。

小勝：破壊でもないですか、ヴィーナスを割るということは。

田部：そうね。

中嶋：このヴィーナスを金槌で割るといふのと……

田部：それは伝統的な美に対する反発というか。

中嶋：それと、マネキンに釘を打つという行為が……

田部：通じてるかもしれないよ。

中嶋：繋がっているように、思えます。

田部：マネキンもヴィーナスも、美女だもんね。美女に反発してるんじゃないの、私がブスだから。ブスの恨みというか（笑）。

中嶋：では、やはり既存の美しさの規範に対する……

田部：いや、美しい人は好きですよ。イングリット・バーグマンはめちゃくちゃ綺麗ね。

中嶋：でも、それに対して割ったり釘を打ったりという行為があるわけですね。

小勝：でも、芸術家である田部さんとしては、田部さん（独自）の美を作るというお気持ちがあるのではないですか。

田部：それはありますよ。だから小説でもね、美人って書いたらね、あなたこんなつまらんことばを書きなさんなってすぐにいうのよ。「美人」と書かんで他の表現があるでしょうとって全部書き直させてね、成功したことがあるんですよ。「そんなことしたらジェンダー会にやられますよ」とっていったらね、その人が「美人」ということばを削除したのよ、素直に。そしたら新聞に取り上げられて。

小勝：マユミ・ウイスニスキさんのパフォーマンスというのが何年に行われたかというのは、ご記憶ではないですか。新聞記事のコピーは頂いたんですが、何年のものかは書いていなかったのよ。

田部：そうなのよ、この人ねそういう記事もとってないのよ。この記事もとってないのよ。だからね、これは朝日新聞の、ええと。

小勝：「第6回コンテンポラリーアート展」なんです。

田部：今は10回位ですからね、4～5年前ですよ。

小勝：もっと前かな、と思ったんですが。

田部：いや、そんなに前じゃない。この人が入ってきてね、本展のほうでもダンスをしましたから。この人のダンスのチームがあるんですよ、教室とか。その人たちを全部連れてきてね、ゆっくり動くダンスがあるでしょう。ああいうのを、とても賑やかだったことがありますから。10周年記念展ですかね、6～7年前ですね。

小勝：なるほどね。では2003年とか2004年とか、そのあたりですかね。

田部：それくらいですかね。

小勝：はい。それで先程もおっしゃいましたように、今後も現代の若手のパフォーマーに着せて……

田部：私が着るわけにいかんからね（笑）。

小勝：はい。といたしますか、そもそも田部さんはご自分が……

田部：いや、作った頃はスタイルが良かったからね。

中嶋：ご自身で着ていらしたんですか。

田部：はい、着ましたよ。

小勝：でも公開はしてないですね。

田部：人の前では着てない。公開はしてないです。

小勝：もう一つ、田部さんがなさったハプニングといたしますか……

田部：ありましたね。泡をかけるの。

中嶋：SNACK BOBO（スナック・バイオビオ）の、1967年ですね。

田部：そうそう、ありますよ。どっかに載ってます。

中嶋：尾花さんとのハプニングですね。

田部：いや、違う。大黒さんが途中で嫌って言い出したの。それで尾花さんが参加して、やってくれた。加勢してくれたの。

小勝：あら、そうですか。尾花さんと田部さんが2人でヌードモデルに泡を塗りつけたんですね。

田部：ヌードモデルを雇ってね。

中嶋：今度は泡を塗りつけるわけですね。

田部：そうですね。

小勝：これはまた、美の規範に何か関係するんですか。

田部：この前ニューヨークのロバート・ミラーでの UNCENSORED という展覧会で似たようなのを観たの。アンセンサーという「検閲なし」という展覧会、ロバート・ミラーがしてたんだけど、そこのビデオ作品で、こうして両手で自分の性器をがっとう開いてね、(何かを塗り付けて) ビデオ2台で見せてるんですよ。それでもね、誰も見てないのよそれを。私ともう一人のアメリカ人がいて。あんなのアスファルト・ピッチをつけたら火傷するからね、何だろうと思って後で調べたらチョコレートでしたね。チョコレートのお風呂みたいなものに入ってたから。

小勝：それは田部さんがやった、ずっと後の話ですか。

田部：ずっと後。最近の話ですそれは。でも5年前から行ってないから、7年前かな。

中嶋：それをご覧になったんですね。思い出されましたか、当時の泡を塗りつけられた時のこと。

田部：思い出してはいないね。ああ、ここまでしてでも有名になりたいんか、と思ったよ。有名になったんですよ、その女の人。でも一遍だけよね、そういうのは結局使い切り。

小勝：田部さんのお話に戻りますと、最近の黒田（雷児）さんの大きな本（注：黒ダライ児『肉体のアナーキズム』、grambooks、2010年）に、田部さんが「第3回九州現代美術の動向展」のパレード、1969年2月のパレードに参加して、人形を背負って歩かれたとか。

田部：マネキン人形。真っ白に塗って、子どものマネキンを背負って歩いたの。これは私、画期的だと思うんだけど、話題にはならなかったけどね。法被かなんかを着て、そこにマネキンを。まだ倉庫の隅っこにありますよ。その子どものマネキン。

小勝：これはどういう……

田部：それは日常性、女性の。子守ですね。子守と茶碗洗いと、なんとかに明け暮れるこの女性の生活を何とかしなきゃね。だから、55年の主婦退職宣言に繋がっていくわけよ。もうこれ以上出来ない、と。もう茶碗を洗わんと、と。

小勝：もう一つ、やはり女性の日常性にも関わるかとも思いますけれど、1968年の「グループ連合による芸術の可能性展」、ここで「セックス博物館」というテーマで田部さんがなされた……（「グループ連合による芸術の可能性展」、福岡県文化会館、1968年）

田部：鏡に描いた。(抱き合う裸の男女と、大きな乳房を抱えて哺乳瓶に乳を絞る女性の下半身を大きな鏡に描いた一对の作品) それとね、こけし人形を男性の性器に見立ててね、10個作ったのよ。こっちから見ると人形で、後ろから見ると性器に見える。そうしたらね、それが5個盗まれて。帰りに見たら5個しかないの。まだありますよ、そこに。見ますか。今は4個しか残っていません。

小勝：是非お願いします。

田部：残ってるのは4個。私よく盗まれるんよ。これ、この写真のパフォーマンス。長い長い性器を縫って……(注：「セックス博物館」で、田部氏がミシンで長い紐状のものを縫った)

小勝：これはやはり性器ですか。男性器ですか。

田部：イメージ。それと内職。日本経済は主婦の内職で成り立っているっていう、こんなのははっきりとコンセプトを作ったの。ここの洗濯機の中はね、小さい瓢箪に臍の緒をつけてがらがらまわしてね、「生まれ出でざる嬰兒たち」(注：年表には「生まれ出でなかった胎児たち」とある)。これは私、自信を持ってね。すごいパフォーマンスだと思ってるのよ。

小勝：この紐と嬰兒はくっついてはいないんですか。

田部：くっついてます。嬰兒ですから。

田部：これこれ。宝物(注：田部氏が「セックス博物館」に用いた作品のこけしを4体取り出す)。

小勝：宝物ですね。

田部：え、たった4個しかない、6個も盗られてるんだ。こういうね、こっちから見たら、ね。

中嶋：可愛らしいですね。

田部：かわいいじゃん。なんでも可愛く作らなくちゃ。

中嶋：ピンクをよくお使いですね。

田部：この頃ね。

中嶋：このピンクの色は、何の画材で作られたんですか。すごく色が現代的ですね。

田部：なんだろうね。アクリルがあったかしらね、もう。

中嶋：アクリルは出てきていると思います。蛍光塗料も出てきた頃ですね。

田部：かもしらね。そういうのは全部批評家が後づけすればいいの。作る人は、全部作るだけでね。後は批評家とかね、おたくたちの人がね、勝手につければいいの。

中嶋：これはご自分で作られたんですか。

田部：いやいや、これはろくろまわしきらないよ。吉井町よ。吉井町はこけしの名産だから。

中嶋：これは売っているものを買って……

田部：違う違う、注文。こんなもんは売ってないよ。

中嶋：特注、売ってはいないですよ。形がちょっと奇妙ですものね。

田部：だから、こんな形にしてっていうんだけど、作ってる人があんまりわかってないのね。

中嶋：わかってない。どういう風に説明されたんですか。

田部：これがやっつですよ。自分も持っとうろうがっていうのに（笑）。

小勝：すみません、少し元に戻りますが、このミシンで縫っているのはやはり長い男性器なんですか。

田部：そうそう。ずっと長いんですよ。10メートルくらい作ったんですよ。

中嶋：これ、桜井さんが首に巻いてますよね。

田部：そう、だから10メートル以上作ったかもしれない。そしてそれを全国放送ですから。溝上健二モーニングショーとかっていう番組の、死んだのよね、このキャスターが。40代で亡くなっちゃったの。

小勝：そのパフォーマンスをしているところを放送された…… KBC九州朝日放送ですね。これが先程お話しした、RKB毎日放送の「九州派再発見」とKBC九州朝日放送は同じ1968年という記録なんです。

田部：そうですか。「セックス博物館」も1968年。こっちはKBCの全国放送（注：「モーニングショー」日時不明）ですよ。だから、そこから全国放送に流したんでしょうね、映像を。

小勝：ではこの年は割とテレビに出演されて。九州派が再発見されたんですね。

田部：やはり再発見しようという……何年？

小勝：68年です。それとこの紐状に縫っておられる性器、これが長いというのはどういう意味なのですか。

田部：それはもう、万人の男を繋いだんじゃない。

小勝：洗濯機の中の胎児は、それとはまた別なんですね。

田部：うん、別でもないよね、あの頃は墮胎が流行ってましたから。

小勝：墮胎された胎児。

田部：そう「生まれ出でざる嬰兒たち」。

小勝：この瓢箪に付いた臍の緒というのは、

田部：なにかゴムのようなものをこのくらいに切ってつけたんですよ。瓢箪は、亭主のお父さんが作っていて、なんでかこんなに送ってきたの。面白いやろ、とかいって。私がなにかそんなのが好きだと思ってるの。それを早速使ったんですよ。洗濯機も全部レインボーに染め上げて、ミシンも。

中嶋：そんなにカラフルだったんですね。

小勝：カラー写真があったら良かったですね。その一方でこちらのガラスに絵を描いたんですか。

田部：鏡絵です。これはもう、真面目に描いたんです。

中嶋：これは何で描いてあるんでしょうか。

田部：アクリルでしょうね。

中嶋：普通少し半透明という感じですよ。

田部：それはもう手におえんからね、88年に九州派展の時寄贈したの。

小勝：福岡市美術館ですね。

田部：時々出してますよ。1個はひび割れてるしね。だからもう危ないからね、美術館に……

中嶋：このパフォーマンスについては、九州派の男性の作家の方達はどのように。

田部：この連中が参加してるからね、面白かったんじゃないですか。

小勝：といたしますか「セックス博物館」というテーマを立てたのが、この中の……

田部：小幡（英資）やろ。

小勝：小幡さんですか。ただ他の人たちは、いわゆる男性器を巨大に作ったんですね。

田部：それが大山右一、こっちが。

小勝：何人かの男性メンバーがこの巨大なペニスを作ったと（記録に）あるんですが。割とまあそのまんま（のマッチョ）といたしますか、何も（ひねって）考えていないというか。

田部：そのまんま、面白くないの。大山右一というのは面白くないのよ。

中嶋：では、全然違う意図や目論みが、同じパフォーマンス、同じ展覧会の中で一緒になっているんですか。

田部：いや、これはテレビには私が出演しただけですから。他の人は出演してないの。

小勝：他の人は他の作品を出した、というわけではないんですか。

田部：それを撮影したかどうかは知らないけれど、パフォーマーとしては私だけが出演したの。これは後で撮った記念写真だから。(注：「九州派展」カタログ、福岡市美術館、1988年、p.107) 映像というかテレビには私だけが出たの。

中嶋：そのテレビに対して、反響などはありましたか。

田部：それはわからないね。

小勝：黒田さんの本で、田部さんについて、「彼女自らが女性性を打ち出したパフォーマンスを打ち出すということはほとんどなかった」と書いてあるんですけども。

田部：自分が裸になってするとかさ、そういうことは一切しない。

小勝：そうですね。いろいろと田部さんのなさっているのは……

田部：岸本（清子）（きしもと・さやこ、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズのメンバー）さんくらいにね、打ち込んでないもん。主婦だもんね。子どもを育てている最中じゃないですか。そんな恥ずかしいお母さんの姿を見せたくないというのが基本です。

小勝：というか、私は田部さんというのはパフォーマンスに関しては、自分が演じる人ではなく、演出者、仕掛け人である、とそのように思いました。それは、今もそうですか。

田部：仕掛け人ですね。今もそうだと思います。だからやってくれる人がいたら遠慮なくやります。

小勝：昨日もちょっと話題に出ましたが、「万博破壊九州大会」ここで田部さんは8ミリで撮影なさっていますね。(注：1969年5月3日-5日、北九州市、福岡市にて行われ、ゼロ次元や桜井孝身、集団蜘蛛、集団“へ”らが参加した)

田部：「ゼロ次元」のね。

小勝：ゼロ次元と「集団蜘蛛」も。

田部：これ(注：8ミリの記録)はありますよ、美術館に。

小勝：「畸形三派狂乱大集会」という名前がついています。(注：「畸形三派狂乱大集会」は「万博破壊九州大会」の後の1969年7月5日、小倉労働会館にて、集団蜘蛛や集団“へ”、桜井孝身らによって行われた)

田部：どこ、場所は。農国会館かなんかあったんです石城町のホールが。今もありますけどね、火の見櫓みたいな。

小勝：「万博破壊九州大会」は戸畑文化ホール（注：戸畑文化ホールの他、農民会館、明治生命ホールでも行われた）、あ、その後の、そう小倉労働会館ですね。

田部：この大会（注：「畸形三派狂乱大集会」のこと）はそれは悲惨なものだった。最後は糞尿痰やらを投げてね、

小勝：それは「(集団) 蜘蛛」の森山（安英）さんでしたか。

田部：そう、「蜘蛛」。それで捕まったでしょう、柳川のデモ（注：1970年11月29日、伝習館救援会結成大会デモ）で。私達は全部写真に（赤外線フィルムで）撮られてたね、警察に。

小勝：田部さんはその時には8ミリでそれを撮影していたんですか。

田部：うん、してたのよ。大事なところをね、カメラを外して肉眼で見ちゃった。プロじゃないね。

小勝：昨日のお話だと、ちょっとエロティックなパフォーマンスを……

田部：蜘蛛でしょう。

小勝：それは蜘蛛のですか。田部さんが仕掛けたんではないんですか。

田部：ないない。それはね、森山。

小勝：森山さん達の路上でセックスをするとか……

田部：蒲団敷いて寝る（注：1970年11月29日、伝習館救援会結成大会デモ）、とか。なかなかしないのよ、それが。するするって言って、だからデモの取材に行ってるうちに、ちょろっとしてんのよ。

小勝：それを撮影しようと……

田部：いや、それはしてない。

小勝：それはそもそもどういう理由で撮影しようと思われたんですか。

田部：なんかやっぱり、面白いから記録にしておこうと思ったんだね。だってあなた、天神の真ん中の交差点でやったんだもの。いくら午前5時とはいえ。午前5時くらいだったらね、電車とか通ってないから出来るんですよ（注：1970年2月26日-27日における「九州ルネッサンス 英雄たちの大祭典」（博多プレイランド、BOBO）の際に、集団蜘蛛のメンバーと集団“へ”の新海一愛らが午後5時頃に天神の交差点で行った）。まだベトナム戦争の頃で、詩人の福森隆っていうのが、ベトコンの旗をたてて出てくるの（注：福森が旗をたてたのは1969年4月27日の「万博破壊九州大会キャンペーン」の時）。

中嶋：ベトナム反戦運動でもあったんですか。

田部：そうですね。福森隆はしっかりそういうコンセプトを持っている人だから。詩人で。

小勝：田部さんとしては、そういう彼らの行為への共感というものはあったんですか。

田部：それはね、森山を支援したかったよ。もう徹底してるから。九州派は徹底しているといいながら徹底してないところばかりだったでしょう。

中嶋：政治的な活動に関してですか。

田部：うん。桜井さんにしろ、絵が売りたいとか売りたいとか。アメリカに行ったりフランスに行ったりしてたじゃないですか。だから売れてなんぼのもん、というところについてますよ、みんな結局。立派なことばかりいってるけど。

中嶋：では田部さんとしては、九州派は政治的な運動としての活動と……

田部：無いと思うね、やってないと思うね。

中嶋：それと前衛美術の活動とがあまりリンクしなかったという風にお考えなんですね。

田部：うん、してない。

小勝：その九州派の活動としては最後になったのは、先程おっしゃったのが……

田部：70年でしょう、結局は。県立美術館でしたのが最後だと思う。そう、私が死に損なったの。

中嶋：4日間徹夜した時のことですね。

小勝：ベトナム絵画ですか。「可能性の意志」展。

田部：「可能性の意志」展はね、あれは県立美術館じゃない。

小勝：これは八幡市立美術館（注：北九州市立八幡美術館）です。《迷彩を施された風景》（1970年）というタイトルになっていますが、これがベトナム絵画ですか。

田部：そうです。男性性器を丸出しにしているのがあるんです。路上に倒れて。警察がいかんとかいって、満生（和昭）さんという学芸課長がいたんですけれど、その時だけは立派でしたよ。「僕の首をかけて展示する」って言ってね。あとは大分の美術館長になった。そんな勇ましい人じゃなかったけどね。その時だけは燃えてね。

小勝：その男性性器が描いてあっても……

田部：そうそう。それで県立美術館に来たんですよ、また同じ展覧会。そしたらそこに紙を貼ってから。紙を貼れっていうから、貼ったの。

小勝：この「可能性の意志」展が県立美術館にも巡回したんですか。

田部：そう、巡回。巡回っていうより、その展覧会をしたのかな。

小勝：田部さんの作品だけが出たわけではなく……

田部：そうそう、みんなのものが出たんですけど、私には紙を貼れっていうから貼ったの。こうしてめくったらわかるように。

中嶋：あ、めくれるようにはなってるんですか。やはり、そういう検閲は厳しかったんですか。

田部：いや、厳しいほどではないよね。

中嶋：それよりも、世間の目のほうが厳しいのでしょうか。

田部：いや、世間の目なんてどうでもいいのよ。全然厳しいとも厳しくないともなんも感じない。自分のやりたいことをやってるんだから。要するに警察に捕まらんようにする、ということよ。

中嶋：そういうことですよね。

田部：捕まったら、お母さん犯罪人、ってなるからね。子どもがね。「そしたら僕もなっていきたい」とかいうようになったら困る。親子でなったら困るもの。

小勝：それでそれ以後、九州女流画家展を主宰されて（1974-84年）。

田部：それから暫くしたら、何かしないといけないなと思って、九州女流画家「展」てわざとつけたの。展覧会をするための女性、という風にしたんですよ。

小勝：女性で集まろうと思ったという理由はありますか。

田部：もう男性はせからしいけんね、一緒にしたら。

中嶋：それまでにはそういうことを考えたことは……

田部：なかったんですよ。何人かいたからね、大黒さんと私と。

中嶋：大黒さんと、中西和子さんもいらっしゃいましたか。

田部：まだ生きてたか。あの人は39歳とか40歳で亡くなったからね。もういなかったよ。早かったんですよ。

小勝：他のメンバーの方でお名前を覚えていらっしゃる方は。

田部：大国留美子とかね。大黒愛子とか、谷口路子とか。

小勝：さっき（1968年のパフォーマンスで）タイツをはいた（人ですね）。

田部：和田康恵とか、一緒になって最初は6人で旗揚げして、東亜画廊でしたの。東亜画廊で社長にとてもよくしていただいたので、出来たんです。

中嶋：ちょっとよろしいでしょうか。これはもっと前の九州派の面々が登場する有名なポスターですけども（注：1961年「九州派展」、銀座画廊のポスターを出して）。

田部：これ61年です。だからもう、すごいですよこの（九州派の）死亡率はね。もう、残ってるのは私と尾花さんだけでしょう。後はみんな死んじやった。ここは全滅。ここは結構……この人は死んだね。ここは生き残ってるわ、ならず者が。

中嶋：この中で田部さんの写真って一番大きいですね。

田部：勝手にするのよ、もくさん（菊畑茂久馬）やらが、ふざけて。

中嶋：石橋康幸が座長で田部さんは「女座長」とありますけれども、それはどういう意味合いがあったんでしょうね。

田部：勝手に付けてんの。意味はないんじゃない。顔が座長的だから座長にしよう、とかいってから。こちら辺の下の段の人が勝手に決めてんのよ。

中嶋：この（顔写真）小さい人たちが。菊畑さんや桜井さんですね。

田部：自分のは小さくしてるのよね。

中嶋：それぞれの写真にはいろいろと面白いコメントがあるんですけども、それは誰が考えたんですか。

田部：これもこの人が考えたんですよ。

小勝：菊畑さんですか。

中嶋：田部さんのところには「一見して日本人に見えるが台湾生まれ」と書かれていますね。

田部：だから子どもが「お母さん台湾人だったの？」って心配して。

中嶋：これは、どういうことだったんでしょうか。結構今読むといろいろな意味で驚いてしまうんですけども。台湾生まれ、植民地出身ということがなにか意味がありましたか。

田部：そんなことまで考える連中じゃないって。政治音痴だから。オチ（・オサム）なんか、全く政治音痴。

小勝：それはやはり、菊畑さんが考えたんですかね。

田部：と思いますね。ことばに関しては菊畑茂久馬。

中嶋：台湾で生まれたことに関して、なにか話題になるようなことはあったんでしょうか。

田部：それはみんな知ってるから。

小勝：みなさん戦前生まれですよ、当然。1930年代。

田部：桜井さんやらはもっと年が上ですね。

小勝：つまり戦前生まれの人にとっては、台湾も日本だったわけですが、それに対して……

田部：ジャパコロニアルよ、知らねえか、って。

中嶋：九州というのは満州ですとか台湾ですとか朝鮮半島からの引き揚げの人たちが多かったんじゃないかと思うんですけども。

田部：多いらしいですね。熊本もブラジルに行ってるしね、一番たくさん。

中嶋：たくさん移民に行かれた方がいて、そしてまた帰ってこられた方が多いと思うんですね。50年代から60年代にかけてそういった人たちは、そのことについてどういう風にお考えだったんでしょうか。やはり田部さんは故郷について書かれていますよね。

田部：そう、故郷がないのよ、私。「書物は家なき子の家」と寺山修司がいつてるけど、私もそうなの。

中嶋：その故郷がないということと、九州にずっといらしたと、東京に行かずにですね。そのこととの間にどういう繋がりがあったのか……

田部：それはお金がなかったから行けなかったというのも一つだし。だから私はニューヨークに移住するって決めとった。何で行くのっていわれても、理由はない、と。ただ行くことに意味がある、とかいってたんですよ。だからお金を一千万貯めたら行くって言ってただけど、なかなか貯まんないのよね、お金って。そのうち、年取っちゃったから。今行く自信はないね。

中嶋：では、行けたら行くと。

田部：うん、元気になったら行くよ。80歳超えたら行くかもしらん。やけくそで。

中嶋：谷川雁の「大地の商人」で、「東京にいくな、ふるさとを創れ」とあって。ふるさとになっていく過程があったのかなと……

田部：とにかくね、自分の産まれたところを失った人の孤独感、これだけはね想像出来ませんよ。だから寺山修司が1番。2人でいても1人、ひとりという名の鳥、青い鳥赤い鳥たくさんいるけど、1人という名の鳥が1番好きだ、とかさ。とにかく面白いよね、寺山修司が1番よ。2人で居てもひとり、すごいですよ。1人で居ても2人、といえるかどうか。1人で居てもみんな、みんなと一緒にいえる人と。2人で居ても1人という気持ちで行かないと、作家にはなれないね。

中嶋：「孤独」、ですか。

田部：そう、孤独に耐えうる人でないと、作家精神は無いと思いますね。

小勝：また孤独を感じていないと、作家にはなれない。

田部：なれないと思う。絶対になれないと思うね。だから渡辺一民という東大の先生が、『故郷論』という本を出してます。中村真一郎とかいろんな作家を例に挙げながら、故郷喪失について思考しているのがあって、私は寝室に置いて何回読んだかわからないんだけど。「幸福は絶望なのです」というカフカのことばが大好きで貼ったりしてますよ。だから、幸福を追い求めている人は幸福になれないんですよね。人生の全てのものに絶望した人が幸福なんですよ、逆説かもしれないけど。絶望からしか幸福は生まれない。

小勝：絶望を知らない人には……

田部：幸福はつかめない。つかめないっていうか、考えられない。

中嶋：田部さんには最初からその喪失感というものが絶望と同じように、人生の中に横たわっているのですね。

田部：ありますね。だからといって、みんなと喧嘩して1人で住むわけではないからね。それはちゃんと家族としての力は認めてますよ。家族力というのは。

小勝：田部さんが昨日おっしゃった、15～6年前ですか、台湾にもう一度行かれたお話。その時には何をお感じになったんですか。

田部：食べ物が美味しくないと、思った。台湾料理なんて不味い不味い。日本が統治していた頃の中華料理と全然違うの。それも、外務省の人が呼んだくらい、一流のレストランなんだけど、なんか臭いんですよね。油の匂いかなにかがフーンとくるの。もう、これじゃない、これじゃないって。

小勝：やはりイメージの中の故郷や、イメージの中の台湾があるんですね。

田部：そう、台湾があるの。食べ物に残っているの、赤いスープみたいなものとかね。不思議な。だからそういうもの、ホイコとか、そういう味はないですね、台湾に。みんな台湾のお料理は美味しいっていうけれど、私は不味い不味いって思ってね。そしてついでに帰りに韓国に1で行ったんですね、リュウ先生が全部紹介状を書いてくれて。韓国の先生。韓国料理のほうがずっと美味しいと思いました。

中嶋：台湾では思い出の地に行かれましたか。

田部：行ってない。

中嶋：とくに故郷を再び訪れるという気持ちではなかったんですね。

田部：ないですね。行ったってしょうがないもん。海の波の高さだけは見てみたいね。本当にあんなに高かったのか、自分が小さいから高かったのか。

小勝：引き揚げの時の波ですか。

田部：いや、引き揚げる前にしょっちゅう地引き網とかに父が連れて行ってくれたでしょう。それで兄がカシヨウ(表記不明)島くらいまで泳いでいくのよ。遠泳で。怖くて怖くてね。O型っていうのはね、用心深いんですよ。一見大胆に見えるんだけど、非常に用心深いよね。だから冒険しないんですよ。だから冒険は嫌いな。冒険でみんなどっかへ行くとか、ハーレムに行ってみたなんていうけど、そういうことには一切興味がないのよ、私。

中嶋：ですけど、いろいろな所にご旅行されていますよね。

田部：1人で行くけどね。それは自分の興味があるから行くんであってね。絵の上の興味とか。バーゼルに1人で行ったのも、「バーゼル・アートフェア」を「ヴェネチア・ビエンナーレ」でポスターを見て、ぱっといくのよ。

中嶋：それは凄い瞬発力ですね。

田部：そういう瞬発力はあるよね。スピード感というか。

中嶋：もう一度女性のことについて戻りたいのですが、1974年になってから、九州女流画家展というものをなさるんですが……

田部：これはね、26人くらいまでいたんですけど、まず決められたことは、男性の審査員の展覧会に出さない。それから会合の時に、「主人が」っていわない。これを決めたんですよ。

中嶋：やはり、奥様の集まりにならないように、ということですか。

田部：そう、すぐに主人がどうのとか、息子がどうのとやりだすからね。そういうことを禁止したの。ちゃんと守ってくれました。

中嶋：そうですか。そこでなされた試みの中や作品中で印象に残ったものがありますか。

田部：作品が良くなならないね。そして、(会員の人の)旦那が入り込んできてね。パーティーからなにから取り仕切るのよ、その人が。だから私は解散しようと思って。この会が私の死んだ後にも残って、愛国婦人会になっとったら目もあてられん。それで、田中幸人を呼んで立会人にして、いきなり解散ですよ。「私達はどうなるのー」って叫んだ人もいるけども。

中嶋：かなり急な解散だったというように伺っています。

小勝：ちょうど10年くらいですか。

田部：12年位経ったと思うんですけども。なんか勝手なことばかりしてね。

小勝：途中で公募にしたんですか。8回展から公募と受賞。

田部：でも大して応募してこなかったもんね。でも賞は出したりして、一応啓蒙的な意味で。

小勝：その公募や受賞の制度に反対して大黒さんが脱退したんですか。

田部：うん、まあそれは口実よ。もう出来ないのよあの人。病気だし、小幡が働かんから。自分が画塾をして身をすり減らして、とうとう死んじゃったんですよ。やめなさいって言ったんだけどね。あんな呑兵衛 3 年で捨てなさいって言ってたんですよ、私。

中嶋：そういうお話を聞いていると、やはり女性同士の連帯のようなものも……

田部：連帯、じゃないのよ。そういう風に全部ステレオタイプの言語を使っちゃいけないのよ。友情とかさ、親密度があったの、とかそういうことばにしないと、連帯とか思想とかジェンダーとか、もろに使うから若い人が付いてこないの。ごめんね。

中嶋：いえ。どういふ関係なのかな、と思ひまして。

田部：だから、そういう関係よ。中西和子さんが消える前に、私にだけはいっておこうと思って来たのよ。それよりも、この哀しみは 10 年語っても語り尽くせないっていうところに感動しないと。そのことばは私は死ぬまで忘れません。連携じゃなくて、ね。そこがわからんと、わからないよ人生は。

中嶋：そういうことが、あまり九州派の活動の中では見えませんよね。

田部：そりゃ見えんですよ。そんなのはどこも見えないよ。岸本さんがどれだけ悩んだか、とかね。そんなのはもろに見えないじゃないですか。どれだけ悲しんだか、とか。源氏物語の昔から悩み抜いて死ぬのは女ばかりですよ。

小勝：そういうところで、またちょっと下世話な話ですが、つまり九州派に所属した女性の方々は、田部さん以外の方は（メンバーの）男性画家とパートナーになって、結局破綻された方が多いじゃないですか。

田部：長さんも桜井さんに利用されただけでね。菊畑さんなんかは絶対に自分の家族に指一本触れさせない。ものすごくもてた男ですよ。女の人が床下に入ってくるほどもてた男よ。

小勝：他の九州派の女性画家が、男性画家の稼ぎのない人、しかも浮気な人やとんでもない人とくっついては破綻していたのに対し、田部さんは毅然としてしっかりと、稼ぎの良い素敵な旦那様と……

田部：毅然としてますから。だって男の子 2 人ですよ。あと旦那でしょう。3 人の男にかなうような男はおりませんよ、この世に（笑）。

小勝：夫と子ども 2 人。なるほど。そのあたりが、田部さんのまず一つ、自分の人生はきっちりと作り、それとともに作品も創り、という……

田部：だから、割り切ってたって、誰かが言ったそうさ。田部さんは公私混同しない、と。九州派は九州派。自分の家族は家族、と分けとったって、誰かが言ったと聞きましたよ。

小勝：くっついたり離れたりしている人が多い中で、田部さんは自分の家庭は家庭で大切に……

田部：興味ないですもん。私はね、20代の頃から絵描きと自衛隊と銀行員とは結婚しないと決めてました。絵描きなんかと結婚したら、最悪よ。絵描きは貧乏だし、いやらしいし。頭は馬鹿だし。銀行員も同じくらい馬鹿ですからね。自衛隊は、戦争反対だから。銀行員は、けちでお金を奥さんにくれないのよ。用心しときーよ。だからこの3種類とは結婚しないと決めとった。

小勝：それで若いうちからちゃんとした方と結婚なさって。九州派が始まる頃から……

田部：そう。だれが一番私のために尽くしてくれるか、ちゃんと見ますよ。

小勝：それでありながら作品はエロティックなところとかもありますね。ですから人生ではなく作品にエロスを発散していたわけですか。

田部：いや、そんなことはないけどね、うちの亭主がやはりそういう、上手なんじゃないですか（笑）。開化させていくというか。性的に、成熟させていく。

小勝：それは、最後に素晴らしいおのろけをいただきました。

田部：そうですね。最後におのろけ。今は耳が聞こえないから、全然話されないんだけどね。

小勝：でも、すごい大病なさったのを看病されて……

田部：私が助けたからね、もうこれで終わりですよ。

小勝：2年くらい前でしたっけ。

田部：2007年ですから。

小勝：もう3年前ですか。

田部：あれはすごかったね。医者のが。もちろん本人の生きる遺伝子もありますよね。本人の遺伝子と医者と家族の力。三位一体で助かったの。先生が「だいたいこの状態だったら、みんなずるずると死にます。でも今田部さんは頑張ってるんですよ」っていうんです。それを聞いて、また息子が感動してから「じゃあ助けてといかん」といってね。みんなで一生懸命に。私も朝も昼も晩も通いましたからね。《健康作品》を拝みながら。いや、ベッドのところに東向きに掛けてるのよ。

中嶋：今年のオーラル・ヒストリー・アーカイブのテーマの一つが、地方の前衛というものでもあったんですね。東京の前衛集団だけではなく、九州派とかいろいろな地域で起きた同時代的な活動について伺っているんですけども。これは愚問になるかもしれませんが、今振り返られて田部さんにとって九州というものにはどのような意味があったとお思いになりますか。

田部：両親が九州生まれだしね。まだお墓もあるしね。浮羽高校がやっぱり好きですね。もう無くなったんですよ。変な名前に変わってるのよね。

小勝：合併されたんですか。

田部：いや、合併かなにか、全然違う名前になって。それから吉井町の豊かさ。柿が美味しいしね、葡萄が美味しいし。豊かなところではありますよ。ただスピード感がないね。

中嶋：変化について行かない、ということですか。

田部：そうそう。スピード感がないから、私に付いてこられないかな。だから「ノンセクション」の連中もね、このスピード感に付いてこられないからね、新しい人もどんどん増えていますけどね。私は厳しいから、辞めていく人もいますよ。10年もいてノンセクションという運動を10年続けてきても、辞めて二科に出したりするのよ。もう絶望ですよ。

小勝：ノンセクションというグループですか。

田部：どこにも属さないというのを、市美術連盟の中に作ったんです。私が初代理事長になる時の約束です。ノンセクション。

小勝：それは何年頃ですか。

田部：2005年に作ったの。初代理事長に私になったんですよ、いろいろな事情で。選挙ですけど。とにかく作品勝負だ、と。あくまでも。そういうモチベーションがなくなってるのね、今は。だからノンセクションだけがなんとか生き延びているというか。

小勝：これは福岡市の美術連盟の中で……

田部：なんか県展なんかのミニ集団みたいになって、もうすっかり保守的になってるよ。

小勝：そのノンセクションが、ですか。

田部：いや、ノンセクションだけは違う。

小勝：福岡市の美術連盟が、ということですか。

田部：連盟が、全然ダメですよもう、絵も。絵も彫刻も全部ダメ。だから、そのダメさ加減がわからないのかな、と思うんだけど。

中嶋：やはりノンセクションということは、どこにも属さない作家であることが……

田部：だから公募展なんかに出したら首ですよ、今でも。

中嶋：九州派みたいだ。

田部：九州派でなくて、男性の審査員に出すなっていつてるの。

小勝：それは九州女流……

田部：九州女流画家展だけれども、とにかく公募展反対は貫いてますよ。公募展に出している人とつきあわないもの、私。これが前衛です。だから、ずっと20代から私を見てきた人がこの前亡くなったんですけど、残念ながら。「田部さんの好きなところは、ぶれないところだ」っていうんですよ。ぶれが全然ないと。最初から一貫して、20代から。「いいえぶれますよ、私はお金に直ぐぶれます」っていうんですけどね。そんなことはないっていうの。ずっと支持してくれたんですけど、この前急に亡くなっちゃったんです。その奥さんは韓国の人で、奥さんとはまだ交流がありますけどね。絶対にぶれないということは貫かないとね、やっとなれないですよ。

中嶋：女性についての評価も年々変わっていますし、いろいろとアップダウンがあって、良くなり続けているというわけではないですけども。

田部：悪くなってよ。

中嶋：一貫して九州派に関わられていた頃から、自分の表現に女性性についてのメッセージを込めながら発表し続けられてきたということが、私が田部さんに関して凄いと思う部分です。

田部：そう、これが前衛で、ただ一つ民族独立についての考察だけは、もう私には出来ません。だからそれを次世代の人にしてもらいたい。民族独立の悲劇。これをどうにかして下さい、っていいたくなるのよね。若い世代が。だから、いつまでもこんな黒いの（注：ブルカ、イスラム女性の被り物）を被っているな、と。女自体が立ち上がらんとはいかんじゃないですか。この前マラソンにも出てましたよ、あれをはめて。馬鹿たれって思った。イスラムのベールよ。あんなもん被ってから、マラソン走れるもんですかね、暑くて。

小勝：でも被ってても出てくるだけ、まだ偉いと思いますけどね。

田部：ええ、その人はね。

小勝：何か他に聞いておきたいことはありますか。

田部：なんか役に立ったんですかね。

小勝：いや、素晴らしいですよ。さっきの「絶望を知らない者に芸術は出来ない」とか、素晴らしいお言葉でした。アディロンダックでなさっていた「非芸術で遊ぼう」という講演にも、私は非常に感銘を受けました。

田部：このハースト教授とのインタビューはね、作り上げたんですけどね、英訳して送ってそれに対して回答を書いたんですよ。通訳を頼んだんだけど、勝手なことをいい出したからやめたの。自分の意見やらをいい出したのよ。「後で質問を送りますから、それについて英語で回答して下さい」ということで、こういうことになったの。

小勝：田部さんの芸術の特徴といういろいろなことがあると思いますが、ここで語っていらっしゃる中で、「芸術は深刻で深い悲しみを表現する暗いものだという考えを否定します」と。

田部：否定しますよ。

小勝：それで、「弱いものへの思いやりや、心の豊かさが芸術の力である」と。

田部：うん。松岡正剛が書いてますよ、「フラジャイルなものにしかエネルギーはない」と。

小勝：松岡正剛の言葉なんですか。岸本清子さんも亡くなる前に松岡正剛を読んで、80年代に対談とかして、傾倒していたようですけども。

田部：やはりあの人は凄いですよ。女とか男とかじゃなくてね、弱者というか、弱者の中にしかエネルギーがないのよ。だけど、あまりにもなくなると、エネルギーもでてこない。北朝鮮みたいに。食べるものもないようになる前に何とかしないと。国家権力の恐ろしさはね、考えておかないとダメですよ。赤紙一枚で、大事な命だろうが何だろうが取ってってしまいますからね。そこは戦っていかんといかん。それはジェンダーとかウーマン・リブではなくて、もっと枠を広げて。だいたいね、フェミニズムっていうのは全てを受け入れていくということが、フェミニズムの基本だったんですよ。保坂和志によれば。だからその精神が、今は反対する人は排除していこうという方向に変わったところで、ダメになっちゃったんですね。

小勝：変わってはいないと思うんですけどね。

田部：小勝さんは、ないんです。最初から。だから私も尊敬するの。若桑みどりはダメなのよ。そればかりで成り立ってるんだから。

小勝：好き嫌いというのは、ちょっとあるかもしれないですね。

北原：福岡は、リブや女性の運動が割と強かったと思うんですけど、そういう人たちとは関係がありましたか。

田部：衆議院とか、たくさん立ったことがありましたよね。社会党とか。ああいう元気があったんですけどね。今はものすごく保守的。

北原：田部さんは、女性の運動とは関係があったんですか。

田部：いえ、全然ないです。でも民主党の藤田一枝は支持しています。

北原：いや、70年代とか、昔は。

田部：特別そういうものには…… 自分がやってるからね。あまり人と連携する気持ちはないのね、自分中心主義っていうか。

北原：そういう女性の運動から呼ばれたりすることはありませんでしたか。

田部：あんまり無いですよ。野口（郁子）さんが館長の頃は、アミカスでいろいろとやりましたけどね。それ以外のところではないですね。

北原：それから家事育児という生活とアート活動を分けていたとおっしゃいましたが、すごく時間がかかりますよね。外にも出て行かないといけないうし。

田部：だからそれは連携ですね、それこそ。夫との。幸いに子どもも寝たら3時間くらいは寝ますからね、岩田屋の休憩所にぱっと渡してね、そして私はいろんなところに出ていたりして、終わったらぱっと取りに来て、まだ寝てるから。そして連れて急行電車で家に帰って。という風な連携プレーは上手く行ってました。

北原：旦那様は、映画の仕事でこういうビジュアルがあるよ、というように、制作活動をサポートして下さっていたんですか。たとえば、こういうことを今の制作で考えているんだというような会話がご夫婦の間であったのでしょうか。

田部：いや、全然無いね。今でもないよ。見せんもん、絵は。あんたたちはね、私の絵は鑑定できないよってしてるの。見せたら文句いうからね、見せない。腹が立つから。

中嶋：そこは自分の世界。

田部：そうですね。長男は興味があって、適切なことばが返ってくるからね。「林檎作ったんだってね、ラベルも作らんね」とかいうんですよ。私はラベルをスーパーから盗んできて貼ってるんだけど。「自分のラベルを作らな」とかそういう適切なことばがぱんぱん返ってくるから、帰ってきたらすぐに絵を見せる。わからん人には見せない。なんだろうね。単なるわがままかもしれないですよ。

北原：先程台湾について、自分の故郷が失われてしまったということをおっしゃいましたよね。その喪失感というもの、家族が居たわけですよ。やはり孤独感というか、喪失感がずっとベースにあるんですか、田部さんの作品の場合。

田部：あると思いますね。喪失感とかね、命名するとまた違和感がでるんですよ。要するに「名づけ得ぬもの」よ。もうなにもかも名づけ得ぬもの。

北原：今から台湾のことを思い出したら、どんなイメージなんですか。少女の頃は食べ物がふんだんにあって、食べ物も美味しかったとおっしゃっていましたよね。お腹を空かせたことは一度もなかったと。そういうカラフルな、豊かな島のイメージですか。

田部：それが、こんな絵になって出てきてると思うんですよ。だからといって、今行こうという気はないの。

中嶋：もう、それは無いんですか。

田部：もう終わったことだから。終わったことは、言いたくないのよ、実は、あんまり。過去を振り返るといのは嫌いなよ。

中嶋：そこを何とか。いろいろと聞いておかないとなりませんので。

田部：だから、ちゃんと伝えたよ。植民地の、民族独立運動はなぜ全部失敗しているのかということを考えるのは、あなたのお仕事です。これをいうだけのために、昨日と今日と会ったの。

中嶋：それが目的だったんですね。植民地の民族独立運動ですね。

田部：民族独立ってというのは、どこかから支配されているから民族独立の運動が起きるんだけど、それが全部失敗しているでしょう。

中嶋：それは田部さんの台湾での経験とも関係がありますか。

田部：台湾の人も民族独立運動をしてたけれども、何人かの青年が銃殺されているもんね。最初に。後藤新平も見事な統治をしましたがね、最初には見せしめで殺してますよ、青年を。それでまず脅しておいて、それからきちっと台湾の人の為になるような統治をしたんですよ、一応。だから台湾の方は、日本のほうが良かったっていつているくらい、一時期。

中嶋：それはいつ頃のお話ですか。

田部：それはこっちに聞いて。

張：それは親から聞いた話ですか、それとも台湾にいた時にそういうような感じがしていたのですか。

田部：それはだから昨日いったように、現地の人との接触が無いからわからないんですよ。

張：先程ありました「日本人だけれど台湾生まれ」ということばに私は引っかかっているんですが、政治的な意識は含まれていないかもしれませんが。

田部：一つの差別用語だった。

張：いや、でも、その時代では、ご自身はどのように周りの人に台湾生まれのことを語っておられたんですか。

田部：私は引き揚げ者だということをプライドにしていますよ。「あんた達とは違うとよ、私は引き揚げ者よ」っていつもいうよ。「引き揚げて来た人よ、違和感あるくさ」っていうんだもん。

小勝：逆に引き揚げ者への風当たりというか冷たさというようなものはあったんですか。

田部：あるといえばあったね。修学旅行とか、引き揚げ者ばかりで一つの部屋に押し込んだり。

一同：え～。そんなことがあったんですか。

田部：そう。それでみんなでわんわん一晩中泣いとった。

小勝：それは浮羽高校で、ですか。

田部：あれはまだ学制改革が無かったから、浮羽高等女学校やろうね。中学だったから。だから私は二度と修学旅行へは行かんって決めたの。

中嶋：それはなんでその人達だけが同じ部屋にさせられたんですか。

田部：それは知らないよ。先生がしたんでしょう。

北原：先生の態度も、引き揚げ者の子どもに対しては冷たかったんですか。

田部：だけど私はね、その先生は別だけれど、引き揚げて来た時に浮羽町にいたコレクターの金子文夫さんのクラスに編入したんですよ。そうしたら4月に来て、秋の文化祭に私が主役ででたの。だからあの先生にはね、私は非常にかわいがってもらったと思ってるの。だから恩返しに、同窓生に呼びかけて彼の何十万点に及ぶガラクタのコレクションだけど、資料館（注：浮羽郡吉井町立金子文夫資料館）をつくってあげたんですよ。彼も同窓会に来てね、田部さんが呼びかけてくれて資料館が出来たことを感謝しますってちゃんとしてくれましたよ。95歳まで生きたの。瀬木（慎一）さんも連れて行ったの。瀬木慎一先生、鑑定しなさいって。

小勝：今もあるんですか、その資料館は。

田部：あります。吉井町に。それで金子先生が、これは1億だなんだって勢いでいうから、鑑定してもらったのよ瀬木先生に。そうしたら、「これは明治の何とかで、1万の価値もない」って選り分けてね。その代わりに、48枚揃っている風俗画があるんですよ。これは今なら2,000万円で売ってやるって瀬木さんがいったの。とにかく金子先生は絶対に売らない人なのよ。時々電話があったけれど、「あの話はどうかね」っていうから、「先生、瀬木さんも偉い人やけんね、売るか売らんかわからん時にいわれんよ。売るって決まったらすぐに電話してやるけん」っていったら、かかってこなかったの。この前息子さんがね、瀬木さんに逢いたいっていうから仲をとって。私は絶対に仲介しないのよ、面倒くさいから。直接行きなさいってしたら、今は200万だった。2,000万が200万になってるの。彼も売らない人になってます。

張：引き揚げ者としての誇りを持っているとおっしゃったんですが、帰ってきてから学校などのことなど、社会的な違う眼差しが……

田部：そりゃ貧乏ってところだけでね、他は負けんですよ。

小勝：それどころか英語は逆に、教育が良かったっていいですよ。

田部：そうそう。100点とってた。

張：それはまた60年代に入って、その時代の雰囲気は、また引き揚げ者……

田部：だんだんとね、引き揚げ者住宅っていうのが町に出来たんですよ。母にあそこに入ったら良いんじゃないっていったらね、「そういうところに入ったら、もう何代にもわたって差別される」っていうんですよ。あの人は見識が高いんですよ。絶対に入らない。そういう色分けを拒絶するっていうのは、偉いと思うよ。その時その時の利益で動いていると、大変なことになっちゃうから。

小勝：お母さんの実家にいらしたんですか。

田部：うん。シナリオで成功した布施博一もね、『純ちゃんの応援歌』で成功したんだけどね。田主丸とその辺に引き揚げて来た人はね、みんな冷遇されてるの、親戚から。彼なんか1年間学校に行っていないんだから。お父さんが引き揚げて来て、烈火の如く怒ったって。だからあの人は私達の1年上なんですよ。吉井町の人だけは、昔から豊かなところだから、吉井町に引き揚げて来た人たちは全然差別されてないわけ。「みんな助け合っていかなといかんよ」って言ってね。

中嶋：地域によって違うんですね。

田部：違うんですよ。貧乏地域はやっぱりね、1人でも余分が入ってきたら排除しようとするでしょう。

小勝：分ける牌が少ないとね。

中嶋：そうすると故郷は無いし、今いるところでも……

田部：住めば都と思うけどね。なんか、ここで死にたくないという気持ちは、どこでもあるね。

小勝：気持的にコスモポリタンなんでしょうね。

田部：そうですね。根っからのコスモポリタンになっちゃったのね。どこでもいっていかんじ。だから私は斎藤義重が好きよ。98歳までうろうろとイタリアまで1人で行ったりして。どっかに1人で行って、田中幸人が斎藤義重展を企画してたでしょう。帰ってきてから、自分が並べる図面を作るっていったんだって。驚くべきエネルギーですよ。じゃ、帰ってきてからねって言って田中幸人がヨーロッパに行ったら亡くなっちゃったの。私が、斎藤義重展（「斎藤義重展－97歳、そのすべてが前衛だった。」展、熊本市現代美術館、2004年2月-3月）のオープンに行ってる。それはそれは南郷（宏）さんの素晴らしい会場演出でした。それですぐ幸人さんのところに急いで行ったのよ。九大に入院してたの。どうだったっていうから、もう素晴らしい展覧会だったよっていったの。そうしたら「ああ、そうね。よかった」っていったの。それが最後やったね。幸人さんと話したのは。

中嶋：今後はどのような活動をされたいとお考えでしょうか。

田部：今後はですね、ニューヨークとかドイツとかでばんばんと個展をやりたいけど、するところが無いから。

中嶋：それも探さなければならぬですね。

田部：自分で売り込むのが出来ないんですよ、意外と。（向こうから）言ってきたのは全部受ける。だから、福井でも大阪でも。言ってきたのは全部こなしますけど。

中嶋：このインタビューも含め、小勝さんの今までのお仕事ですとか、由本みどりさんのインタビューとかいろいろありますから、田部さんの作品への評価は高まると思います。

田部：もう、小勝さんのお陰ですよ。

小勝：いえいえ、とんでもない。

田部：小勝さんがついてきたからインタビューも受けたのよ、悪いけど。ごめんなさい。

中嶋：いえいえ、ありがたいと思っています。

小勝：英文がどんどん出ますので、来年早々。不肖、私の下手な文章ですが、由本みどりさんが素晴らしい英

語に翻訳して下さったものと、由本さんご自身のインタビューと、続けて出ますので（注：Reiko Kokatsu, "Mitsuko Tabe: Beyond Kyûshû-ha", *n.paradoxa*, Volume 27: Women's Work, January 2011、及び、Midori Yoshimoto, "Tabé Mitsuko Interview" in Yoshimoto and Reiko Tomii eds., "Collectivism and Its Repercussions in 20th-Century Japanese Art," a forthcoming issue, *Positions: East Asia Cultures Critique*, Durham, N.C.: Duke University Press）。

田部：反応がありますかね。

小勝：きっとアメリカとか英語圏からの引き合いがあると思います。

田部：あればすごいけど。あったら百万でも出しますよ。

中嶋：そうしたら、これからの展開が……

田部：出来るか出来んかね。風任せよ。どうでもいいっていう感じ。

小勝：こちらはどこで発表されるんですか（注：アトリエにある新作を指して）。

田部：これでしょう。これはヴェネチア・ビエンナーレもんなのよね。これを全部貼ってね、上から下まで。中に映像を一つ入れたらね、ヴェネチア・ビエンナーレもんよ、って南薫君がいったからさ。これ、縦なんですけどね。うまく成功しなかったんですけど、これは何とかしないといけないの。縦にして、これだけではダメだから、線を引かなくちゃ。この線を引かないとみんな眩暈がして倒れちゃうのね。後ろの絵もね。だから線を引くことによって眩暈から解放されてるの。その線がまた難しいのよ。

小勝：こちらのこの感じが、こうなってるんですか。

田部：いえいえ、だからこれを更に進んで。この上にはもう線だけしか引かない、とかね。

小勝：林檎の木の葉っぱの感じですか。

田部：いや、そういうのも全部卒業っていうか……

小勝：あちらの小さい作品とこう、似てますよね。

田部：そう、だいたいこういう、光だけの

小勝：これは大阪の（個展に出品された）……

田部：うん、これはこれですもんね。これじゃね、まだダメなの。余分なものが多すぎる。

小勝：そうですねっていったら何ですが、もっと少ないほうがいいですね。

田部：私はね、これじゃ、メアリー・ブーンとかさ、そういうのをいつも頭に入れてるの。

小勝：これは、なんか本当に素晴らしくなりそうな。

田部：これは何とかならないといけないんだけどね。今まで考えんで作ってきたからね、考える力がなくなってるんですよ。

小勝：いえいえ、やはり直観で。

田部：何年かかるかわからないね。

北原：作られる時はこれ全体の構成を作られるんですか。それとも部分部分で増殖していく感じですか。

田部：ほとんど無意識でやってきているからね、それが今こたえてんのよ。最新作はこれですけどね、《デュシャンのパイプ》。また、多すぎるでしょう。なんか俗っぽいところが多いから、私。通俗人間で。

小勝：教養がありすぎるんじゃないですか。

田部：教養が無いから困るの。ミーちゃんハーちゃんなの。ミーちゃんハーちゃんしかね、小説は書けないのよ。頭のいい人は書けないの。肝心の、これこれ（文芸雑誌『ガランス』17号、2010年、田部氏の小説、ミツコ田部「肝心の「家」」掲載）。これを誰か（に差し上げます）。

小勝：私はいただいています。

中嶋：私も見せてください。

田部：これは、ここの編集長にね、これはようできたって褒められた。

中嶋：では、今日はもっと本当は何いたいことがたくさんあったんですが、そろそろ時間になってしまいますので、お開きとさせていただきたいと思います。2日間も有り難うございました。

この冊子は2020年3月31日現在、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブのウェブサイトで公開されている田部光子オーラル・ヒストリーを印刷したものです。インタビューをより正確なものにするために、修正あるいは追記される可能性があります。最新のバージョンはウェブサイト (www.oralhistory.org) をご確認ください。

This booklet prints the oral history interview with Tabe Mitsuko published on the website of the Oral History Archives of Japanese Art as of March 31, 2020. The interview can be revised or annotated for the purpose of accuracy. For the latest version, please visit our website at www.oralhistory.org.

田部光子オーラル・ヒストリー

インタビューアー：張紋絹、北原恵、小勝禮子、中嶋泉

デザイン：西岡勉（フォルダ）、青木意芽滋（冊子）

組版：若林亮二

校正：森かおる、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ

発行：日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ

発行日：2020年3月31日

Oral History Interview with Tabe Mitsuko

Interviewers: Linda Chang, Kirahara Megumi, Kokatsu Reiko and Nakajima Izumi

Design: Nishioka Tsutomu (folder) and Aoki Imoji (booklet)

Typesetting: Wakabayashi Ryōji

Proofreading: Mori Kaoru and Oral History Archives of Japanese Art

Published by: Oral History Archives of Japanese Art